

飯野ビル全景



ビル正面入口から受付フロアまでの
直通エスカレーター



双日(株) オフィス 周辺の案内図

〒100-8691 千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング



地下鉄アクセス メトロ千代田線・丸の内線・日比谷線「霞ヶ関」下車、出口C4
メトロ銀座線「虎ノ門」下車、出口9

お知らせ**2017年度ニチメン東京社友会総会・懇親会開催**

恒例の社友会総会・懇親会を下記要領にて開催いたします。

場所は、お馴染の、双日株の本社（飯野ビルディング）で行ないます。

皆様多数のご参加をお待ちしております。夏場でもあり、軽装でお出かけ下さい。

開催日 ； 2017年 **7月13日(木)** 11:30AM～1:30PM（開場11:00AM）

会場 ； **双日株式会社・本社21階大会議室**

所番地——千代田区内幸町 2－1－1 飯野ビルディング内

アクセス ； *メトロ千代田線・丸ノ内線・日比谷線「霞ヶ関」下車、出口C 4 方面へ。
（但しB4で出ないこと）。通路天井の案内板を良く見ながら、館内エスカレーターを利用して、**3階オフィス・ロビー**迄。

*メトロ銀座線「虎ノ門」下車、**出口9**。飯野ビルまで徒歩5分程度。

当日会費 ； **無料**（軽食、飲物を用意致します）

年会費 ； 現金の収受は、諸般の事情で取り止めております。

お手数でも、**銀行または郵便局振込**で、お願いします。

・・・振込方法は、別項「事務局からのお願い」を参照下さい。

特記事項

AAA 同封のハガキに出欠の別を記入して、投函ねがいます。**締切 6月25日(土)必着**。

BBB このビルはセキュリティ確保のため、入館カードが必要です。

3階ロビーの双日受付付近で待機している担当世話人に氏名を告げて、このカードを受取った上、ゲートを入れて下さい。

又、退館の時も必要です。それまでは必ず手許に保管下さい。

ゲート出入りの要領は、SUICAやPASMOの使い方と全く同じです。

*その他お問い合わせは、会報末尾の「世話人一覧表」記載の世話人にお寄せ下さい。

事務局は、**FAX：03－6858－7216**， **Eメール：menkwa@sojitz.com**

2017新年賀詞交歓会における 会長挨拶

会 長 石 原 啓 資



新年明けましておめでとうございます。
皆様も穏やかな新年をお迎えのこととっております。

本日はお寒い中、かくも大勢の皆さん方149名の出席を頂きまして本当に有難うございます。

また、双日株式会社様からは、佐藤社長様はじめ、21名の役職員の皆さん方に御出席賜りました。本当に有難うございます。

本年2017年は酉年ということで、格言的に申し上げますと「騒ぐ」ということですが、昨年からも既に騒がれておりまして、イギリスのEU離脱、次期アメリカ大統領にトランプさんが選出、ということで、大いに騒がれております。

特にトランプさんは選挙戦で、大幅減税、多額のインフラ投資ということで、インフレ政策を行なうということですから、株価、金利等々が上がって、アメリカ・日本では株が上がって来ている、という状況が続いております。

しかしながら、期待先行で進んでおりますので、何かマイナス点が起これば、何が起こるか分からない、ということで、今年の騒ぎは昨年以上の騒ぎになるのかな、という心配をしております。

また、ヨーロッパの方では、4月にフランスの大統領選挙、9月にはドイツの連邦議会の選挙、ということで、昨年から続いております保護主義、自国第一、と言った動きが加速されるのか、それともブレーキが掛かるのか、この二つの選挙は重要な意味合いを持っているのではないのか、ということで、本年の騒ぎの原因になるのかな、という心配もしております。

かような厳しい世界状況の中で、双日株式会社様には順調に収益を上げられ、株価も300円前後に上がって来ております。

これも佐藤社長様はじめ皆さん方の御努力の賜物だ、ということで、まことに尊敬させて頂く次第です。

ところで、我がニチメン東京社友会につきましても、皆様方に大変ご協力頂きまして、当時私が会長に就任した時には、会員数が減少して歯止めが中々掛からなかった、という状況でしたが、新しく新会員も迎え、何とか会員数を維持出来るような状況に近づいて来ております。引き続き皆さん方の御協力を切にお願い申し上げます。

また、世話人会の世代交替ということも、色々知恵を絞りながらやって来ておりますが、まだまだ世代交替が進まない、という状況でございますが、いま私自身思い起こせば、若い人、

年配の方、老若が混ざり合っって色んな意見を出して、この社友会を益々発展させて行こうということで、あまりスピードアップしないようにしようかな、というふうに今年は思っております。

健康が続く限り、世話人会の皆さんにも協力頂きまして、本社友会を益々皆さん方の為になる、また、皆さん方の心の支えになる社友会、という形で発展させて行こうと思っております。どうか皆さん方の引き続きの御協力を、宜しくお願い申し上げます。

最後になりましたが、本年が、本日御出席の皆さん方の御健康で穏やかに心豊かになる一年になること、及び、双日株式会社様の中期経営計画の最終年度を首尾よく初期の目的を達成されんことを、心からお祈り申し上げて、私の御挨拶とさせていただきます。

ご清聴、有難うございました。

[illegible]

ニチメン東京社友会新年賀詞交歓会<来賓ご挨拶>

双日株式会社 代表取締役社長 佐藤 洋 二



皆様、明けましておめでとうございます。
 双日株式会社の社長をしております佐藤でございます。

ニチメン東京社友会へは、今回で5回目の参加となります。
本日は皆様方の非常にお元気なお姿を拝見する機会を頂きましたが、私はこのような社友会の催しを、非常に嬉しく感じて
おります。



さて、さきほど石原会長からもお話がございましたが、昨今の世相において、ヨーロッパでは英国のEU離脱宣言、そして明日は米国のトランプ新大統領の誕生があり、世の中は非常に騒がしくなっております。

昨今、グローバル化という言葉がよく使われておりますが、現在はどちらかと言えば、各国が保護主義に走り分散を始めていく、というような逆の力が働いている、ということを新聞報道でよく目にします。事実このような動きについては、今後、ヨーロッパ・米国など夫々で色々な形で現れてくることが想定されます。具体的にどのようなところへ変化を齎すのかということは、これからじっくりと見ていく必要があると思います。

今日の日経新聞にも出ておりましたが、やはりトランプ大統領の一言、一言、口先介入という表現が使われておりましたが、それによって大きく為替が動き、何かが動くというように、これだけの影響力を持つ新大統領が誕生する、ということでございます。従い、我々を取り巻く環境は常に、局地的・短期的には、何らかの大きな変動を至るところで受ける、というのがこの一年続く年になるだろう、という覚悟をせざるを得ない状況と感じています。

一方、私共の経営状況についてですが、この四半期決算は順調に来ております。

今年度の当期純利益の目標は400億円であると期初に発表しました。残念ながら上期決算は154億円ということで、進捗率は余り良くありませんが、当初の想定通りで何ら心配をしておりません。色々な会議で報告を受けている各本部の状況は極めて良好で、第3四半期では充分その遅れを取り戻す状況に来ていると確信しており、通期目標の400億円を下ろすことなく、期末に向けてやっていける状況にあります。

以上は2017年3月期の話ですが、17年度のことも一緒に考えを巡らしております。様々な新しい取組がドンドン出てきており、お陰様でアセットも積み上がってきております。これらのものが花開くのは、17年の後半位からだと思いますが、内容的には非常に面白い状況にあります。

本部別に少し申し上げますと、いま一番活躍しているのは、田中本部長の化学本部です。ここは、100億円を狙えるネット利益を打ち出せる状況まで来つつあります。その他にも、いろいろ新しい取組があり、新しい収益として還元する、ということが大体見えてきています。新しい資産で新しい活力を生んでいく、ということが徐々に会社の中で浸透してきていると考えています。

機械本部については、インフラにフォーカスを当てています。インフラ関連と言いますと色々な分野がこの中に入ってきますが、それらを全て取り込もうとしています。例えば、病院関連の取組も始めていますが、世界各地において新しい病院施設の開設や開発が行なわれており、それらを積極的に取り込み、そのような舞台での社会インフラ事業を進めております。また、我々が得意としてきたプラント関係があります。昨年の新聞紙上にも出ておりましたが、インドの高速貨物鉄道については、トータルで約3,600億円の受注を去年夏の時点で確定させております。これは、三井物産に打ち勝ち、我々が多くの受注を実現しましたが、このような貨物輸送やトランスポーターション関係にも注力しており、この舞台での活躍もこれから期待したいと思います。

次は再生エネルギーですが、この分野でも資産が積み上がってきています。一番積み上がっているのが太陽光ですが、勿論、風力やバイオマスという新しい発電についても、現在トライをしております。加えて、LNGや、環境に優しい発電・ガス発電についても、アジアを中心に積み上げを図っております。このようなものが今後ドンドン積み上がっていきますと、私共の安定収益がより強固なものとなります。これから色々なことが予測され、また懸念されるものもありますが、こういった安定収益を生むアセットが増えてきているということは、取りも直さず、それらの問題に対応する体制が同時に出来てきていると感じる次第です。

他にも色々ありますが、航空機のターミナル事業では、内外の新しい民営化に対する取組を積極的に行なっております。国内で今進めているところは高松ですが、これから出てくるであろう福岡や、他のいろいろな地域での新しい空港ターミナルの事業への取組があり、当然その場合には、周辺のインフラに関する取組も出てきます。国内については勿論充分にやっていきますが、海外では、太平洋のパラオや、インドネシアなどの島々における空港事業についても検討しているところです。これらの地域は、今後の人の移動ということを踏まえた新たな市場として捉え、トライしていくことを決め、新たな組織を立ち上げている次第です。

それから国内では、神戸開港150周年ということではありませんが、USJ（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）がある場所に新たにホテルを建設する為の用地買収を決定しており、私共の大阪の新たなスタートの一つの目玉にしたいと考えております。また、これを契機に大阪近県、関西地域での商活動をこれから活発にすることを決めております。

このようにして、国内外でのインフラ関連事業については、チャンスを見て大きく取り組んでいきます。勿論、リスク管理は当たり前で、これを外すということはございませんが、多くのビジネス・チャンスがあり、それらを十分に検討出来るような組織・人員の整備が整ってきた、ということを皆様にご報告したいと思います。

それから、既にご覧になった方々もいらっしゃると思いますが、双日という会社のルーツ（日本綿花、岩井商店、それから鈴木商店の三社）に関する歴史展示物を私共の21階に昨年設置し、様々なレプリカをはじめ記念となるものを置き、その紹介を始めました。これは、私共の起源、そして歴史というものを若い世代にもキッチリと残していきたいということです。過去、色々なことがございましたが、これまでの三社の歴史を正しく若い世代に伝えていきたいと思います。これらを伝えていく中で、よくよく考えて頂ければ、先輩諸氏が遺してくれたものは、我々が苦しんだものに比べると、はるかに偉大で、はるかに大きい、ということが判ってくると思います。そのような三社の歴史から来る各々の世代が、自信を持ってこの会社の将来に向かって邁進し、働いていく、それによって一つの大きな役割を担ってくれるのではないかと、という期待を込め、この歴史展示をやることを決めた次第でございます。今後も若い人たちの採用、新卒や中途採用を行っていきますが、それらの人たちにも、私共の会社の歴史を知ってもらい、誇りを持って働いて頂きたい、という思いでございます。

長々とお話を申し上げましたが、私共はしっかりと足を地面につけて業務に邁進し、結果を出していきます。さきほど石原会長が仰いましたように、私共の会社を数字で評価頂けるよう、業績の向上が株価に反映され、配当は新たな社会的還元となるように、と考えております。

皆様方は、今まで大変長い間ご苦勞をされ、今日ここにご出席されていると思いますが、今後、益々健康を維持管理され、楽しい人生を送っていただけるよう祈念いたします。皆様方に比べ、私共は若手、若手と言っても古うございますが、今後もこのような交流の場を作りたい、諸先輩の経験や知識を私共の若い世代に継承して頂くような場も作っていききたいと思っております。

大変長くなりましたが、皆様方の今後のご健康と長寿を祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。ご静聴、有難うございました。

ご長寿会員のお祝い

世話人 西 村 照 男

2017年賀詞交歓会に於いて、恒例のご長寿会員の表彰が行われました。

表彰者は、白寿は該当者はなく、米寿の方は、1930年生まれの

石澤 謙一、松本 靖史、丸山 泰三、松本 寿夫、三分一 克美、市川 元久

の6名の皆様方です。

当日、表彰式にご参列されたのは三分一克美さんお一人で、残念ながら残り5名の方々は欠席となりましたが、当会からお祝いの金券を出席された方には贈呈し、欠席の方には後日ご自宅に送呈致しました。

式の終わりにご出席の三分一克美さんが表彰者を代表して答辞を述べられました。

受賞者代表 三分一克美さんの答辞：

明けましておめでとうございます。

私は、1951年にニチメンに入社致しまして、爾来、経理・財務・人事・情報処理を回って、大阪、東京、シカゴ、ニューヨーク等の各地で、先輩諸氏の方々、また皆様方のご指導、ご支援を頂きまして、恙なく社業を終えました事を心から感謝しております。

考えてみますと、1920年代の日本の平均寿命は、それまで40才台だったらしくて、それがドンドン伸びまして、今や平均年齢80才の時代になって、これは、医療・技術の進歩とか、それから国が豊かになったとか、色々な原因があったと思いますが、本当に有難いことだと思えます。

私が今回米寿のお祝いを頂きましたのも、そのお陰だと思って、有難く思っております。

終りになりましたが、今年は激動の年と言うことが言われております。どうか、皆様方が、ご健勝でご発展されることをお祈りいたします。

今日はどうも有難うございました。



答辞を述べる三分一さん

2017年度 新年「賀詞交換会」開催報告

編集部 奥 村 睦 夫

1月19日（木）双日㈱本社21階大会議室において恒例の新年会を開催。

今回から開場を11:00と30分早めましたが、曇り空、寒さにもかかわらず多数の会員諸氏（別掲載出席者名簿）のご参集を得て、開会までに会場内彼方此方でお互いの無事を確認する話の輪が多数できた。

定刻11時30分、総合司会奥村世話人の開会宣言で始まり、当会・石原啓資会長による新年のごあいさつ。

続いて来賓代表として双日㈱代表取締役・佐藤洋二社長よりお言葉をいただく。（詳しくは、本号巻頭のお言葉本文をご覧ください。）

引き続き長寿会員の方々の表彰、さらに三分の一克美様から米寿を迎える事ができた喜びのお言葉などいただく。（詳しくは、別掲載の「ご長寿会員の表彰」をご覧ください。）

恒例の新春を祝う“乾杯の儀”は、大先輩の中川十郎様。若手社員とOBとの交流の必要性などを力強く提唱された。

その後は、会場ところ狭しと歓談、談笑の輪が拡がり、御神酒とお料理を楽しみ、1時間半がアッと言う間に過ぎ去った。

そして、午後1時半、奥村総合司会の中締めでお開きとなり、次回の再会を約しながら閉会とあいなった。



後列左から：木津、園山、新藤、蛭田、入江、北川、奥村 右上列外左から：倉又、中田
前列左から：花澤、大山、榊山、石原、長谷川、倉持、西村、栗田

2017年賀詞交歓会 乾杯挨拶

中 川 十 郎

御来賓各位、並びにニチメン社友の皆様、新年おめでとうございます。

社友会の御計らいで、かつてニチメンで共に働いた社友が毎年1月と7月に相集い、懐かしいニチメン時代を思い出すと元気が出てきます。

このような素晴らしい出会いを毎年企画、実行頂いている、社友会幹部の皆様には厚く御礼を申し上げます。また案内や受付を手伝っていただいている方々にも心から感謝いたします。

日商社友会では時折、OBの勉強会を開催されているようです。ニチメン社友会でも有志で勉強会をしたらいかがでしょう。

先ほど佐藤双日社長からOBと若手社員との交流を検討していると話がありました。OBの貴重な経験を若手に伝承することは意義あることだと思います。この構想が実現することを期待しております。

さて本年は内外多事多難の年となりそうです。英国のEU離脱交渉が3月から始まります。明日20日はトランプ氏が第45代米国大統領に就任します。

中国は経済が下降気味です。トランプ政権は日本政府が力を注いできたTPPからの離脱を決定しています。2月末からは、神戸ポートピアでいよいよ東アジア包括的経済連携（RCEP）16カ国の交渉官会議が始まります。日本としてはこの機会に発展するアジアとのさらなる連携強化を図るべきだと思います。

このような大変革の時代に双日が新たなる戦略の下、さらに活躍し発展することを期待しております。

それでは本日ここにご参集の皆様のますますのご健康とご健勝を祈念し、乾杯をいたします。皆様、元気よく、声高らかにご唱和ください。

「乾杯！」有難うございました。



中川十郎さんによる乾杯の挨拶



2017年新年賀詞交歓会 懇親会風景



2017年新年賀詞交歓会 懇親会風景



◎2017年度 賀詞交歓会 出席者 リスト
2017.01.19 開催

(敬称略)

(非会員) 支援者

今井恵子
増川恵子

(ご来賓その他)

大樹二夫聰史茂義也志勤郎裕悟淳崇誠彥起幸弥
繁洋良 博 昌哲正 龍太 真 孝聰秀正聰
谷藤木井村原本田井中井田濱川田藤田岡林木
原段佐茂水松西藤此花田平山高平森加倉吉小青

(非会員) 双日支援者

大村野 熊松村 恭慶恵 子子子

①一般会員	104名
②世話人等	21名
③双日ご来賓等	24名

出席者数 合計
149名

務雄夫一男藏三博生朗光裕江造浩稔晴
志登磐憲信甲博泰壽一昌幸秀邦
田間潟尾村浦江浦上口本本海川水本
本本榊松松三溝宮村森山山山吉吉吉
マヤ

(社友会役員・世話人)

資夫 洋雄 史夫子 雄雄 彌孝 一男 郎美 次
啓則 弘隆 睦奈 緒幸次 久 春照 和恒 俊
原又川 山江村 津川持田 藤山村 澤田山
石倉長大 入奧木北倉 栗新園西花 蛭榊

(会員) 支援者

赤城枝美
垣田佐代子
滑川和子

子伸穰司	朗美人也	之昭晃司	德宏枝憲	啓謙興雄	郎仁喜二	行郎英郎	郎弘男郎	郎勇弘人	介也孝也	孝彦代
厚	良潤三	克武哲俊忠	宏正允一	尚眞	昌幸賢	啓清政十	宣憲捷武	昭喜恒榮	正義龍昌	昌良典
藤枝女井井藤	一水石浦藤山	我原瀬橋田	尻中	本田田木福	根川谷島部	田村口沼生	尾本尾本	尾合		
近三月	坂桜佐三	清白杉須陶曾	大高高武田	田谷塚津富	豐豐豐	中中名南西	西橋蓮埴林	林平廣深	廣深星堀	
廿		夕		ナ		ハ				

(一般會員)

青	木	政	和
淺	井	正	彦
淺	子	豐	治
芦	村	八	郎
東	利	信	子
甘	木	武	廣
荒	田	照	雄
池	永	俊	幸
池	本	由	浩
池	黒	紀	通
石	原	靖	子
石	原	利	清
五	畑	安	造
伊	藤	隆	枝
今	村	宏	雄
岩	居	英	夫
岩	田	海	一
宇	木	隆	昭
大	保	弘	長
大	崎	静	生
大	田	禎	三
大	塚	栗	之
大	西	啓	子
大	場	岩	勇
大	平	隆	治
大	森	有	雄
大	島	良	作
岡	田	聖	男
沖	野	泰	彦
小	西	順	久
河	原	信	稔
笠	田	治	治
勝	木	和	子
鎬	澤	康	司
蒲	崎	厚	郎
唐	西	弘	男
川	路	齊	彦
北	寺	靖	勲
木	城		信
金	林		二
小	林		明
小	林		介
			幸

◎ 2016年度(2016年7月～2017年6月)年会費(3千円)入金状況とお願い

2017年05月10日現在

会員数	入金済会員	長寿会員(註1, 2)	終身会員	未納会員
516	438	38	3	37

＊ ＊ 2015年度分未納者数 ＊ ＊ 15

尚、来年度(2017年7月～2018年6月)年会費 納入済の方→ 176 (註3)

お願い：

2016年度会費を未納付の方は当年度中の納付に協力下さい。

2015年度分未納者は大至急2016年度分と合わせ納付頂きますようお願いします。

当会会則第11条の規定により2期分の会費未納者は会員資格喪失となります。

振込先は、下記いずれかを利用して下さい。(振込手数料は各自ご負担願います。)

1) 郵貯銀行

口座番号：00100 - 4 - 318041

口座名義：ニチメン東京社友会

(ゆうちょ銀行に口座のある方は、口座間送金を利用すると手数料は無料です。)

2) 三菱東京UFJ銀行 東京営業部

普通口座

口座番号：8225155

口座名義：ニチメン東京社友会 代表 倉又則夫

振込に際しましては、振込者名欄にご自身の名前を最初に左詰めに記載願います。

(ネンカイヒ、ニチメン、XXネンドカイヒ等の記載があると振込者名が通帳に記載されず、振込者が特定できません。)

(註1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へのご寄付とみなし処理させていただきます。(会運営上大変助かります)

但し、何らかの手違い等であれば事務所までご連絡下さい。

(註2) 長寿者氏名：(50音順敬称略)：

石川勝美、伊藤安雄、井本公一、岩居宏一、浦谷弘三、大塚静子、大野久生、大村譲、柿本寅之助、河西郁夫、門松孝、上条達雄、亀田昭、木内純一、北村俊夫、古藤彰三、近藤貞一、斉藤弥、椎木与志也、新野敬一、高間宏治、伊達邦雄、中村昌義、南部晴雄、平岡昭三、廣瀬一彦、福原昭二、藤野泰三、古川熙、堀部義数、松尾憲一、松本忠夫、三嶋敏夫、宮浦博、三宅葉、宮田信雄、望月昌徳、吉田孝生

以上38名

今年から長寿者になられた方

石澤謙一、松本靖史、丸山泰三、松本寿夫、三分一克美、市川元久

以上6名

今年の長寿者は、44名です。

(註3) 2017年度(2017.7～2018.6) 年会費納入済会員 (50音順敬称略) :

青木浩、青木政和、赤城枝美、赤澤宏哉、我妻寿一、赤間智明、浅井正彦、朝倉重道、芦村八郎、東信子、甘利廣、新井康友、荒木武雄、幾島清、池田照幸、池永浩、石原清、石原啓資、石原靖造、泉伸夫、伊藤尚志、井上正博、今井宏臣、入江隆史、入野英次、岩田英昭、内山田純一郎、宇津木長、海野敏夫、大西勇、大野悦良、大羽陽一郎、大森啓作、大山陽子、岡島岩男、岡田茂、奥野義夫、奥村睦夫、尾羽沢正敏、河西良治、勝田泰司、加藤資一、鎗木順治郎、蒲澤信男、唐崎和彦、川崎恵美子河路浩吉、川畑正巳、北川幸雄、喜多嶋雄徳、木寺厚二、木全磐樹、京野勉、久世清司、窪田厚三、熊谷信弘、倉又則夫、栗原靖幸、黒川智水、黒住厚、小林正史、小林靖幸、小松敏範、古谷野和夫、三枝伸、坂井良司、桜井潤一、桜井征夫、笹原弘、佐藤統次、佐藤光治、佐野進、三分一克美、篠塚美郷、柴田実、島田俊彦、清水武人、白坂泰之、新藤孝、菅沼利太郎、菅谷省三、杉浦俊之、杉本佳久、鈴木譲治、鈴木春美、須藤忠昭、陶山晃、瀬在道晴、園山春一、大工原正徳、高尾勝、高田秀子、高橋正尚、高松宗信、竹内可能、田尻眞啓、田所忠彦、田中偉堯、田中弘、田村達也、田村順子、津田賢一郎、土田成穂、土井安之、土橋勇、富田仁、豊木啓喜、豊福清二、永井清光、中尾舜一、中田龍彦、永田堅志郎、永田洋一、中谷勝、中原正紀、中村静人、名島憲一郎、滑川和子、南部捷郎、西川周、西田昇、西野幸夫、西村昭男、西村照男、西村輝男、庭野松三、野城恒男、野本定男、羽中田鐵也、花澤和郎、林博之、林正弘、林義人、久本紘一、平石豊、平井出良彦、平尾龍介、平川真淳、平岡幹雄、廣本昌也、深尾孝、藤井正之助、星合良彦、細井吉一、細谷和夫、堀江亘、堀典代、本田務、前田孝、松浦淳、松坂茂、松田實、松村森男、松本宰子、丸野純、三嶋光博、溝江博三、宮尾迪子、村上匡一、村上泰生、本松巖、矢島孝、安井修司、安武国章、八津道夫、柳沢明、山口一光、山邑陽一、吉内健次、吉海秀造、吉川浩、吉木健、吉田修一、吉田俊成、吉水稔、若月義和、渡辺重幸

以上176名

(註4) 2016年10月以降で寄付をいただいた方々

大村善勇、岩居宏一、柿本寅之助、佐藤統次、中村昌義、藤野泰三、三嶋敏夫、大野久生、吉田孝生、井本公一、大塚静子、佐藤弥、松本忠夫、木内純一、高間宏治、門松孝

訃 報

(平成28年11月17日～平成29年5月16日)

ニチメン東京社友会

※非会員

No.	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享年
1	鈴 木 悠	鉄 鋼	2016年 8月27日	85歳
2	高 野 千 秋	化 工	2016年 9月10日	80歳
3	山 口 富美子	不 明	2016年11月20日	92歳
4	越 野 量 路	機 械	2016年11月29日	83歳
5	山 口 富 治	機 械	2016年12月16日	92歳
6	矢 口 三 郎	経 理	2016年12月26日	87歳
7	※伊 藤 重 臣	不 明	2017年 1月26日	92歳
8	杉 浦 好 治	業 務	2017年 2月 3日	84歳
9	※塩 見 俊 章	化 工	2017年 2月 7日	67歳
10	埴 生 栄 勇	木 材	2017年 2月16日	83歳
11	成 見 和 男	化 工	2017年 5月 9日	83歳
12	熊 谷 信 弘	建 設	2017年 5月16日	78歳
13	杉 本 佳 久	元 専 務	2017年 5月24日	81歳

ニチメン大阪社友会

※非会員

No.	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享年
1	田 中 太 郎	人 総	2015年 8月 3日	98歳
2	鹿 田 良 信	織 維	2016年11月 6日	87歳
3	清 水 忠	紙 パ	2016年11月19日	96歳
4	※古 畑 智	食 料	2017年 1月 4日	85歳
5	奥 村 清	機 械	2017年 1月14日	89歳
6	小 見 繁 大	織 維	2017年 1月14日	87歳
7	中 島 清 和	情報シス	2017年 1月17日	74歳
8	国 武 貞 俊	人 総	2017年 1月27日	91歳
9	上 田 真 平	織 維	2017年 2月 6日	81歳
10	岩 澤 清 一	人 総	2017年 2月11日	85歳
11	池 田 誉	織 維	2017年 2月18日	88歳
12	柳 澤 清 充	機 械	2017年 4月 1日	82歳
13	伊 藤 俊 朗	元副会長	2017年 4月 6日	84歳

ご冥福を、お祈りいたします。合掌

1977年(S52年)ニチメン入社組 40周年同期会

樋口 龍彦

1977年(昭和52年)にニチメンに入社したのは東西で男性45名、女性40名合計85名であった。その後は、東西それぞれ都合のつく有志の集いはあったが5年前の2012年(平成24年)に食糧本部出身の久富氏が東西合同の入社35周年記念の同期会を呼びかけたのに続き、今回もグランドプリンス高輪で40周年記念の同期会が開催された。

男性陣にはチラホラ退職者も見られるもののニチメンから双日へ引き継がれた関連会社勤務だったり、独立したり、転職先で未だ現役と言う面々も多かった。一方女性陣は永遠のマドンナ揃いで会場を大いに賑わせていた。今回は総勢28名が集い、始めは互いに名前が思い出せなかったりしたものの、薄くなった頭を目の前にしながらも、そこは直ぐに40年前の姿をイメージし、健康、孫、元NMマン、ウーマンの動向や旅行等に話に大いに盛り上がり、昔話x桜と満開の花が咲いた。

続いての品川プリンス・イーストタワー下のカラオケでの2次会は、グループサンズ・キャンディーズ等で歌や踊りに大いに弾けたのは言うまでもない。(一寸孫には見せられない位の弾けようであった。)願わくば皆が健康で又5年後に再会したいものだ。

この同期会開催に向けて色々と骨を折り幹事を務めてくれた久富氏には深く感謝する次第である。



後列左から：川島、魚本、角掛、樋口、高山、高橋(要)、高橋(博)、青木、佐久間(峯田)、宇野澤(梅野)、久富
中列左から：山本(修)、陰山、脇、奥野、北川、滑川(児山)、神谷、金子、入江、丹下
前列左から：坪井(満野)、大味(海藤)、加藤(河手)、徳永(笹原)、根本(菊池)、深作(中島)、龍田(有村)

(以上、敬称略)

1977年(S52年)ニチメン入社組
40周年同期会風景



第7回ニチメン・デュッセルドルフ(DD)会 開催報告

浅 利 眞 司

11月12日(土)「芝パークホテル 別館2階 アイリス」(港区芝公園)に於いて第7回ニチメン・デュッセルドルフ会が開催されたので、その模様を少しばかりご紹介いたします。

この会は、2006年に茅場町鉄鋼会館で第1回目を開催、関東地区は、福本匡純さんが、また中部・近畿地区は、柳澤清充さんが世話役となって、毎年交互に開催し、第6回まで順調に親交を重ねてまいりましたが、2012年から4年間の間一旦中断しておりました。この度、福本さんの後を任せられた池永浩さんを中心とする少し若手のチームが発足し、新しいDD会が見事復活することができました。(福本さん、柳澤さんありがとうございました。後はお任せあれ)

準備期間が短くまた、久しぶりの開催とあって、関西地区からの参加は、大場俊雄さんだけでしたが、20名が集いひと時の親睦を深めることができました。

会は、記念撮影の後1970年代(7名)、80年代(8)、90年代(5名)が円卓別に着席し、新世話人代表池永さんの司会で始まりました。まず、休会中の物故者の黙祷では、高野康雄(74歳・鉄鋼)、田中義巳(87歳・繊維)、池田格(82歳・化工)、赤尾佳秀(76歳・繊維)、諸橋良吉(88歳・業務)、大西憲二(72歳・経理)の6氏のご逝去を悼みました。

次に今回ご出席の最長老、岩居宏一さんと唯一関西より参加の大場俊雄さんからの一言頂いた後、坂井啓治さんに代表して乾杯の音頭を取っていただきました。

Ein Prosit, ein Prosit /アイン プロージット アイン プロージット

der Gemütlichkeit! /デア ゲムウートリッヒカイト!

Ein Prosit, ein Prosit /アイン プロージット アイン プロージット

der Gemütlichkeit! /デア ゲムウートリッヒカイト!

ein, zwei, drei, Prost!! /アイン ツヴァイ ドライ プロースト!

ドイツ語での“1, 2, 3 乾杯”で、大盛り上がり気分が高揚し思わずGatzweiler, Diebels "Altbier"はないのとホテルのホステスさんを困らせたり、その後は、ワイワイガヤガヤ、近況報告も持ち時間オーバーが続出(年配者ほどその傾向高し)、話の途中に、合いの手が入ったり、コメントが入ったりして司会者を悩ませていました。ホテルのご厚意に甘え宴会時間を延長するほどの大盛会となりました。みなさん本当にお疲れ様でした。

今後も年1回、20名以上の参加者を確保しての楽しい会を企画していきますのでDDに関係の皆様お誘いの上、是非参加のほどよろしく願いいたします。



デュッセルドルフ近影（坂井啓治さん提供）



Sojitz Europe



Klosterstr. 22（ニチメンDD発祥の地）



後列左から：鈴木良典、細井吉一、齊藤至弘、高橋恒正、鈴木譲治、野尻幸宏、清水眞司
 中列左から：三好俊介、蒲澤信男、浅利眞司、池永浩、脇郁晴、藤井敬三、北野秀明、
 前列左から：篠塚美郷、菅谷省三、岩居宏一、坂井啓治、福本匡純、大場俊雄、

（以上、敬称略）

俳句の会「いろは句会」

塚 本 幸 雄

「いろは句会」は平成29年6月には創設以来29年経ち第331回を迎えることになりますが、昨年11月から本年4月までの月例句会に提出された俳句の中から、会員の皆さんの自選の俳句を以下にご披露致します。

子一人に大人四人の七五三
老いぬればひと日の重み冬支度
酉の字に三水ほしき年男

宇治田薫風

朝霞山々の峰見え隠れ
一面の青麦畑風やさし
夕餉膳つまみに添へる酒の粕

久保田悦子

晩秋のパレード熱く北の町
新郎のくしゃみに新婦照れ笑ひ
陽だまりの影の長さや春遠し

佐藤 英二

夢もなしさして変らぬ年始
初富士や過る一文字新幹線
如月の風に身を切る修行僧

下川 泰子

為すべきを為さざるままに早師走
大いなる寒満月のひとり道
春浅し雲の流れは定まらず

塚本 光生

神木を崇めて年の始まれり
春雷や間遠に聞こゆ母の声
束ねたる便り見直す小正月

藤野 徳子

春雷や庭の葉先が揺れ始む
おしくらまんじゅう連日続く馬鹿騒ぎ
夜の影におじけ恐るる尾花かな

若月 義和

ニチメン バスケットボール部の歴史

北 川 敬

平成28年10月1日、大阪府民スポーツ・レクレーション・フェスティバル組織委員会事務局より、私宛に、「生涯現役スポーツ賞」の”金賞”を贈呈することに決定したので、この贈呈式に出席戴きたし」との通告を受けた。

日時は平成28年10月27日（木曜）午後2時 大阪府庁本館5階「正庁の間」。

何だろう？ あれー？ と思いつつ参上することに決めた。当日は受付の係り員の丁寧なお迎えを受け、松井一郎知事より 金賞受賞者17名（80才以上）、銀賞受賞者30名が賞状並びに、私にはバスケットシュート姿の絵の入ったネクタイを頂戴した。

その時、小生は、ニチメン・バスケットボール部（大阪本社―東京支社）の固い絆に結ばれた諸君の顔が目に浮かび、何とも言えない歓喜を肌で感じとった。

創生期の池島幹生さん（故人、加工製品部 バンコック駐在が長かった）。

何時も寄り添って温かく部の活動を見守って戴いたノッポの三分一克美さん。

大阪本社では、リーグ6期間に、都度、部の昇格を決め、遅ればせにチームが出来た東京支社も、毎年昇格した。前者（大阪）1部昇格も果し、松下電器、住友金属、積水化学、等 強豪を相手に善戦し、後者（東京）はバンコック遠征 選手諸君は入社後 日も浅かったが、現地の新聞に活躍の詳細が広く行き渡ったことが強く印象に残っている。

光陰矢の如し、自分も含め固い絆に結ばれた仲間たちは一堂に会する機会を持つ度に、アルコールを酌み交わしお互いの健康を気遣い合っている。



後列左から：孫・康作、次女・雅
前列左から：妻・治、筆者

会員寄稿文

今「平和」とは何か

……パクス・ロマーナとパクス・アメリカーナ……

そして「パクス・ジャポニカ」のすすめ

(下)

竹 内 可 能

歴史学者の上山春平によれば、世界の歴史の中に思想上の「平和」の系譜を求めるとすれば、18世紀のルソーまで遡ることを示唆されている（哲学者の中には「神の国」を著した4～5世紀ごろのアウグスティヌスを指す者もいるらしい）。その平和の精神が「フランス革命」（1789）のみならず、アメリカの独立（1776）にまで受け継がれたことは、前者が自由と平等を、後者が万人平等・基本的人権・主権在民といった大義名分のもとに勝ち取られたことから明らかなことであった。

そしてルソーの平和思想は、やがてカントの「永遠平和のために」の中の世界連邦（諸国家連邦）や世界共和国の構想につながってゆく。今日いうところの「国際連合」（国連）もまさにカントの構想にもとづくものであったのであり、更にはこれを引き継いだものが、先のウィルソン大統領による「平和14か条」だったというわけである。従ってローズベルト大統領などによる大西洋憲章にしてもポツダム宣言にしても、たとえそれが米国の政治的理想主義であったとしても、その精神は20世紀に至るも尚この世界的な「平和」の系譜にあったことだけは確かなことのようにである。

ここにわたしの深い感慨がある。

繰り返しになるが日本の「戦争放棄」が、あの敗戦時アメリカの占領軍から押し頂くようにして、憲法（九条）に書き込まれたものだったことは自明である。こんにち改憲派の人々が目指すところの最大の理由も又、この点にもとめられよう。しかしそれにもかかわらず、世界史上の「平和」の系

譜の中に、これが戦後七十年もの間わが国の国是として不磨の大典のように、紆余曲折を経ながらもなお今日まで生き存らえてきた理由は一体何だったのか。それには下記のような幾つかの大きな理由があったのではないかと、わたしは考えている。

第一に、先に述べたヘーゲルのいう「絶対精神」、つまり日本国民による「はじめに非核三原則ありき」だったことはいうまでもない。あの広島と長崎に投下された原爆によってくり広げられた地獄絵の阿鼻叫喚……その魂が止揚して生まれた国民の絶対精神……が基本にあったからではなかったか。

第二に、これもまた哲学者ヘーゲルの思想にいう「現実」、すなわち今日世界は自身による制御もきかない「核」という自爆装置で、自ずから滅亡の危機に瀕していることである。こうして一触即発の「核の均衡」による平和（Pax Nuclei）の下であればこそ、きのうまでナイーヴな夢か祈念か、さなければ政治的理想主義の道具立てでしかなかった「戦争放棄」が、これまで日本が戦争に巻き込まれることの危険を抑制してきた現実的な役割を無視できない。

第三に、哲学者柄谷行人のいう、日本人の伝統的な文化に根ざした平和論を挙げたい。かれは憲法九条の先行形態は「徳川の平和」、つまりPax Tokugawana（パクス・トクガワナ）に遡ると論じている。徳川時代には成文法（憲法）はなかったものの、国制としては「軍事力の放棄」があったとする。戦後日本の「戦争放棄」が国民の間

に根深く定着したのは、こうした日本人の無意識な伝統文化によるものとし、その拠って来るところはフロイトのいう「超自我」に求めている。(ここは心理学の理論にわたるので解説は省略させてもらう)

以上がわたしの率直な感慨ともいえるべきものだが、ここにあって一つだけ加えておきたいことがある。それはこのあともう一度触れることになるが、「日米安保体制」のことである。「戦争放棄」という一見してナイーヴとも思えるわが国の国是が、長い間床の間の置物のようにして尊重されつづけてきた真の理由は、まさに「日米安保体制」のお蔭ではなかったのか、というのがわたしの逆説の感慨でもある。

ルソーとカントの間

ところで思想家ルソーと哲学者カントの間には、「平和」に対する基本的な考え方に相違はなかったろうが、人間の「自然状態」という点に関しては、興味深い考え方のちがいが認められる。つまりルソーによれば人間(人類)は原初の「自然状態」にあったとき自由で平等であったとされる。その自由と平等つまり「平和」が失われることになるのは、文明が進むにつれて私有財産の観念が発生し、自然状態が社会状態に移行するとき、富の不平等が法律によって正当化されると、不正で悲惨な政治体制が生まれたからとされる。彼の思想の根源は「自然に還れ」というにあったのだろう。

これに対して哲学者カントは、人間の「自然の状態」について全く逆の考え方だったと思われる。つまり隣り合った者どうし(個人も国家も)は、もともとお互い敵意に脅かされているのが「自然状態」であるとした。かれはこの自然状態の中に、人間の本性としての「反社会的な社会性」を嗅ぎ取っていたのである。そして彼の目にその最たるものとして映ったのが、当時の国民国家間の戦争の姿だったと思われる。

だからこそ隣国どうしが「平和な状態」

を保つためには、人間の「理性」にもとづく世界的な政治制度が必要とされることを説いた。それがこの哲学者のいう世界連邦・共和国であり、「平和」の思想的原点であった。彼は「理性が自然を制御すべきもの」と考えたにちがいない。

既に老境にあったカントが小冊子「永遠平和のために」を敢えてものしたのは(1795)、フランス革命のロベスピエールが断頭台の露と消え、反革命の気運が頭をもたげてきた頃にあたる。当時戦争に明け暮れていた国家間の、平和への歩みが遅々として進まぬことへの危機感がこの老哲学者の心を動かしたのだろう。ヘーゲルに引き継がれるドイツ観念論の先達カントにしてこの晩年の著作こそ、まさに驚くべき政治的な、いわば世界初の「脱・力の論理」的な平和提言だったのである。

カントとヘーゲルの間

しかしこのカントの平和論を厳しく批判したのも、誰だろうカントの後継者にしてドイツ観念論の完成者といわれるヘーゲルその人だった。もともとヘーゲルの弁証法は、カントの哲学の批判から説き起こされたといわれるが、とりわけこの平和論はヘーゲルの目からすれば「ナイーヴ」(naïve)としか映らなかったにちがいない。

哲学者ヘーゲルには「絶対精神は自己実現する」という有名な言葉がある。「絶対精神」については先に触れたが、これこそヘーゲル哲学が説く最高の原理とされてきたものだ。彼はこの原理について手を変え品をかえて弁証法的な論理を展開しているが、この言葉はその昔なら「神」でよかったし、今なら「理性」と置き換えてもよいようにわたしには思える。

しかしヘーゲルのいう「絶対精神」には、「神」や「理性」というだけでは説明のつかない含意があることに注目しなければならない。そこには人間の歴史の発展に見られる弁証法の適用がある。「斯くある」という

現実とは、弁証法によると「定立」(正)であり、「斯くあるべし」という新しい動きは「反定立」(反)であり、それらの相対立から新たに生まれる現実を「総合」(合)と呼んだ。

東洋の哲学者ならそこに輪廻を見ただろうが、ヘーゲルはこうして繰り返される「正・反・合」の回転の中に歴史の現実と発展を見逃そうとしなかった。

こうした弁証法の歴史的論理をもってすれば、カントの「永遠平和のために」を読んだヘーゲルが、これをあまりに“うぶ”(ナイーブ)だと失望したであろうことは容易に想像される。この二人の哲学者は当時それぞれフランス革命の現実を目の当たりにしていたが、かたやカントが反革命の台頭と混乱に愕然とし、やにわに永遠平和を唱えはじめていたのだが、かたやヘーゲルはそれでもフランス革命に、歴史的な発展の継続を期待していたのであろう。

ヘーゲルがいうもう一つ有名な言葉、「理性的なものは現実的なものであり、現実的なものは理性的である」は、往々にして誤解を招きやすい。しかし上述のように「定立」と対立する「反定立」には、理念や理想が含まれているはずで、ヘーゲルの思想のなかでは、結果としての「総合」がたとえ不満足なものであっても、その時点でならば、それはより理性的であると同時に、より現実的なものであると見なしたのであろう。

「パクス・ジャポニカ」(日本による平和)

のすすめ

これまで多分に哲学者ヘーゲルを取り上げてきたのは他でもない、パクス・ジャポニカを支えてきたと思われる三本の柱の一つ、「日米安全保障体制」のことを最後に考えてみたいからであった。もとよりこのわたしに安全保障問題を詳細に語る資格があるとは思わない。しかしわたしが今本稿で論じたいのは「平和」についてであり、と

りわけ今「パクス・ジャポニカ」(日本による平和)のすすめである。

そもそも「パクス・ジャポニカ」はそれ自体歴史的にも大いなる矛盾をはらんできた。すでに詳述したように「非核三原則」という国民の絶対精神にもとづく国是としての「戦争放棄」は、偶々とはいえ世界的な思想の系譜の中にある「平和の論理」(脱・力の論理)である。

片や「日米安保体制」は、いうまでもないが戦争の抑止力としての、アメリカとの同盟関係による現実的な「力の論理」に基づいている。

とりわけ「パクス・ジャポニカ」に内在する矛盾は、日米安保体制の本質、つまり日本が非核三原則によって世界の「核の蚊帳」の外にありながら、一方でアメリカの「核の傘」の中に庇護をもとめようとする、何人も否定しがたい矛盾であろう。にもかかわらずこの「日本による平和」が何故戦後70年もの間維持され続けてきたのか。それはまがうことなくわが国の国是「戦争放棄」との関連でしか説明できないところのものだ。

先にわたしはこの国の「戦争放棄」が、何故こうも長く生き存えることができたのかについて考察してきた。そして最後にわたしの逆説の感慨と称して、その理由の最たるものに「日米安保体制」を挙げたのだった。日米安保体制があってこそ憲法にいう「戦争放棄」はまがりなりに護持できてきたのではないか。

そしてまた国是としての「戦争放棄」があったからこそ、「日米安保」もより良く存続しえたのではなかったか。少なくともよりよくこれを制御してきたことは歴史が証明するところである。

「パクス・ジャポニカ」(日本による平和)の矛盾は、「戦争放棄」と「日米安保」が併存する矛盾だ。しかしここが思案のしどころではなからうか。もしも国家の安危を占

うというならば、「戦争放棄」の国是がないままに「日米安保体制」に踏み込んでゆく場合の歴史的な危険は、逆に「日米安保体制」がないままに「戦争放棄」を国是に維持する場合のそれに似て、当面そのいずれも非現実的で危険極まりないケースだと私は考える。

わたしが「パクス・ジャポニカ」のすすめというとき、むろんお勧めするのはその矛盾ではない。それは「力の論理」が行方を失っている現下の、日本人による世界のための「平和」提言である。矛盾と苦渋をはらんではいることが百も承知のうえだが、まさにヘーゲルがいう現実的であると同時に理性的ともいえる、「現実」そのものの堅持なのである。

ルソーが夢に見、カントが心に描いた永遠平和も、地球規模でいえばあれから二百年以上も経つ今日なお、その実現は人類の視野にも入ってきてはいない。19世紀の哲学者ヘーゲルは、世界平和もそれが人類究極の「絶対精神」であるかぎり、自己実現すると信じていたにちがいないが、かれの時間軸に刻まれている単位は、century（百年）どころか、millennium（千年）だったかもしれない。

われわれ日本人に地球規模の使命があるとすれば、それはヘーゲルのいう「世界の絶対精神」が自己実現を果たすまでの時間

軸のなかで、人類の破滅なしに時間をかせぐとすれば、少なくとも「パクス・ジャポニカ」（日本による平和）のような、現実的であると同時に理性的でもある「平和維持装置」による他はないというのがわたしの考えである。

あらためて思い起して見るがよい。70有余年前のあの日米戦争に敗北を喫して以来、日本国民が戦勝国アメリカからいみじくも学び取ってきた「平和」に関する貴重な教訓に三つあったことを。第一に広島と長崎に投下された原爆の悲劇、第二に自由と民主主義、第三に憲法にいう「戦争放棄」である。わたしたちがそのアメリカに対して、わが国の相撲でいう「恩返し」を形の上で示すというのであれば、今こそ時宜を得たものと思える。

そのためにも「パクス・ジャポニカ」は、広く世界に向けたわが国の平和宣言であることにはかわりはないが、身内としてのアメリカにたいして大きな義務と責任がかかる。アメリカがわが国の同盟国とはいえ、世界の代表的な潜在的暴力装置であることにはかわりはないからだ。

それはまずこの国に向けての「暴発制御」のための宣言であり装置でもあることを、しっかりと肝に命じなければならないだろう。

（おわり）



会員寄稿文

私の優雅なアマゾン生活

芳 賀 信 明

今の世の中、アマゾンと言えば、南米の密林や大河のことではなく Amazon. com. (アマゾン・ドット・コム) になってしまいました。そんなアマゾンと私の関係は2003年にさかのぼります。

ニチメン現役時代には書籍を物色するには目と鼻の先に丸善があったし、ちょっと足を延ばせば八重洲ブックセンターもありました。しかし、ニチメン退職後の2003年に前立腺癌で前立腺全摘出手術を受けてから一切仕事もやめたので、東京に出る機会がほとんどなくなってしまいました。地元には大きな本屋さんがないので、好きな書物を物色するのもままならなくなりました。

そこで、ネット書店のアマゾンで試しに本を買ってみました。最初買った本は辰巳芳子さんの「あなたのためにーいのちを支えるスープ」でした。女房のリクエストにこたえて試しに注文したものです。この本が無事に届いてから、私の本の購入先はアマゾン一本やりになりました。

新聞で書物の広告を見て、面白そうなのがあればメモを溜めておいてアマゾンで買う。現物を見ないで購入するため、全く期待外れの本が来ることもありましたが、多くは注文した翌日に配達されます。地元の本屋さんに注文しても最低一週間くらい待たされることに比べれば便利なことこの上ありません。

そのうちに、アマゾンから売りに出されている本の下にカスタマーレビューとして黄色い☆マークがついていることに気が付きました。これは過去に、その本を買った人たちが書いたブックレビューで、☆1個の最低評価から☆5つの最高の評価まで5段階あります。

本を買う際に、このレビューに目を通してみると非常に参考になります。

そこで私もブックレビューを投稿してみようと思い立ちました。最初の頃は投稿してからいくら待ってもレビュー欄に載らずにイライラしたこともありましたが、アマゾンに問い合わせると、色々と採用の基準があることが分かってきました。主なものは、レビューが800字以上で長すぎる場合、次に書物の本文からの引用が多すぎる場合などです。しかし、最近では、この規制もかなりゆるくなってきて、驚くほど長文のレビューも載るようになりました。アマゾンも多数の投稿をいちいち審査しているのでは効率が悪いので、あるNGワードを決めておいて、これに触れたものは自動的に排除、これを通過したものをマニュアルで審査しているようです。アマゾンのサイトに書き込むのですから、いったん撥ねられると原稿が手元に残らず消えてしまいます。用心深い人はレビュー原稿のバックアップコピーをとっているようです。

このようにして私もレビューの実績を積み重ねてきたある日、アマゾンらしきところからメールが入りました。「あなたはVine memberに選ばれたので、商品の送り先の住所・氏名などを確認してください。」と言うものです。私は、これはいわゆるフィッシング詐欺ではないかと疑いました。フィッシング詐欺とは偽のメールを打って、クレジットカード情報などを聞き出さそうとするものです。私は逆にアマゾンにメールを打って、本当にアマゾンからのものかどうか問い合わせました。アマゾンからの返事は「あなたはもうVine memberに登録されているから住所氏名などすでに登録されているものを再確認してくれば結

構」と言うものでした。

Vine memberに登録されると、月に一度、新製品の商品リストがメールで送られてきます。その中で好きなものを一品選んでくれば、自宅あてに送付する。その商品を使ってみて評価をレビューとしてメールしてくれればよい」と言うものでした。

私がどういう基準で選ばれたのか、理由は不明です。このころまでにはレビュー件数は累計で50件くらいだったかと思います。

その翌月から商品リストのメールが来るようになりました。

しかし、欲しい商品を申し込むと、みんな品切れ。やむを得ず、たいしたことのない雑貨類をもらうことが多くなりました。最初にもらったのは、当時幼かった孫のおむつ入れボックスでした。それから、メールはもらうが、それこそデイトレーダーなみのマウス捌きで、できるだけ早くクリックしない限り欲しいものを手に入れる方法はありません。

そのうち、このメールが毎月の第二木曜日の朝10時ころに入るとアマゾンから知らせがありました。その日はコンピュータに張り付いてメールがいつ入るか見張ってなければなりません。メールが入って商品リストを開いても、ぐずぐずしていると、目の前でめぼしい商品がパッパッと消えてなくなるのが分かります。最初に手に入れたやや値打ち物の商品は定価1万円程度の三脚でした。日常的には中村屋のカレーセットとか麒麟の新発売のドリンク類、亀田製菓の柿の種の新製品などを貰いました。

正確には覚えていませんが、2013年の後半あたりから、アマゾンの方針が大きく変わりました。いままでは、とにかく早い者勝ちだった試供品提供が、こんどは各個人ごとに「お客様専用ページ」なるものをもうけて、アマゾンが試供品を入れてくる。品物を選ぶのにも時間的に余裕があって、

一週間程度は私の専用ページに滞留しています。この試供品は5品目までは専用ページから選べる、5品目のうちレビューを書いた分については枠が空くから、その後に専用ページに入ったものを選べる。5品目全部レビューを書いてしまえば、枠が5品目分空くから、またさらに5品目選べるというわけです。実際にはせっかくお客様専用ページ入っている高額商品でもたとえば乳母車とかカーチェアなどのベビー用品などは、私には不要だから申し込みません。試供品は原則として転売や譲り渡しは禁止という厳しいルールがあります。

ご参考までにお客様専用ページの注意書きの一部を引用しておきます。

「お客様専用ページへようこそ。このページでは、お客様の注文やカスタマーレビューの投稿履歴をもとにしたおすすめ商品がいくつか掲載されています。プロフィールに入力していただいた情報は、将来、よりお客様がご興味を持っていただけのおすすめ商品を掲載できるよう、活用していく予定です。それまでは、お客様の注文等の履歴に応じない商品も掲載される場合があります。第三者へのサンプル品譲渡は禁じられておりますので、ご興味のない商品が掲載されている場合は、ご興味のある商品が掲載されるまでお待ちいただくようお願いいたします。Vineチームでは、お客様の興味に合った商品をより多く掲載できるよう最大限の努力をしております。こちらでは一度に5つの商品を申し込むことが可能です。……以下続く」

そのころにもらった高額商品は、パナソニックのヘアドライヤー（16000円程度）、ブラウンの洗浄機つきシェーバー（4万円相当）、などがあります。試供品は到着してから一か月以内にレビューを書かないとこれまたメンバー失格の理由になります。

私はまたVineの中のアルコール飲料のメンバーにもなっているので、年に数回は国産ワインやビールの試供品をもらっております。

布団クリーナーや雑穀調理器、オーブントースターなどの家庭用品を貰うことが多いのですが時にはCDやDVDを貰うこともあります。

昨年暮れには「アメリカン・ホラー・ストーリー：ホテル」なるブルーレイのDVDを貰ってみました。レディー・ガガ主演の映画ということで面白そうだと思って期待していたのですが、到着してみたらDVD 4枚もある大作。しかも、完成品ではなく製作途中の未編集というまとまりのなさで、一枚目を見てそのエログロ血みどろの映像に辟易、とても4枚も見る気もなくレビューは☆一つということで勘弁してもらいました。

アマゾンではレビューアーを一応格付けしていて、トップ1000レビューアー、トッ

プ500レビューアーなどありますが、私は今のところ350位前後をうろうろしております。この格付け基準も公開されてはおりませんが、一応「皆様のお役にたつレビューを書いた人」ということになっているようです。順位によって貰える商品が違うのかどうかも分かりません。

昨年後半にはブルックスのランニングシューズ、ティファールの鍋・フライパン4点セット、ペンタックス双眼鏡、フィレンツェ製マニフレックス高反発ベッドパッド、フィリップスメンズシェーバー、フィリップスの電動バリカンなど高額商品次々とゲットすることが出来ました。またノーベル賞晩さん会で3年連続飲まれたという高級ブランド、テタンジェワイン(ノクターン)とかいう高級ワインも頂き今年の新年会で家族そろって美味しくいただきました。

これからも、どんな商品がもらえるか、楽しみな毎日ではあります。(了)



会員寄稿文

私とモーリタニア

園 山 春 一

本文に入る前に社友会の会員の皆様に提案させていただきます。皆様一人一人がニチメン時代に人と違った仰天の、驚きの、興味津々の、面白い経験、体験をなさっておられると思いますが以下はわたくしのそのような体験記です、この呼びかけに応じ皆様の貴重な経験を編集部にかけて会員の皆様と大切な体験を分かち合いませんか。では、以下に拙文を書かせていただきます。

この原稿を読まれる方々はモーリタニアがどこにあり、どんな気候風土の国かご存知だとは思いますが日本では馴染みのない国なので紹介するつもりで以下を認めました。まず我が国とこの国との経済関係ですが、以前はスニムと言う国営企業の鉄鉱石がニチメンを通じ日本に輸入されていました、ほかにタコ・文甲イカの取引があり、現在日本で消費されるタコの1/3がこの国とモロッコから輸入されているといわれ、その取引以外にはこれといった関係はなく、鉄鉱石の取引も今はありません。

アフリカには現在58の国があります。第二次大戦後の1945年には、独立国は4つしかありませんでしたから（エジプト、エチオピア、南アフリカ、リベリア）戦後70年間で54の国が誕生したことになります。多くの国は1958年ごろから62年にかけて独立しました。それまでのアフリカは欧米諸国の植民地でありアフリカ大陸の総面積の80パーセント以上が帝国主義、植民地主義を掲げる欧州諸国の支配下にある存在でした。モーリタニアは1891年以降フランスの植民地でしたので植民地主義・帝国主義の犠牲となったアフリカの典型的な国の一つです。植民地時代は近隣のセネガルなどの国々がフランスの植民地統治の中心でありフランス人が多数移住し、それなりに地場産業を本国向けに興し、特に、砂糖、綿花、落花

生、熱帯果実などを中心に開拓、開発が行われていました。一方、モーリタニアは、砂漠のど真ん中にあり旧宗主国であるフランスの搾取政策に魅力的な原料もなく、農業開発にも向いていない上に地政学上でも重要拠点でないため開発がほとんど行われていない手つかずの国でした。

しかし、1958年に西アフリカの国々が独立した当時、このモーリタニアと旧スペイン領西サハラ（現在はモロッコ）の国境沿いにあるZUERATE地区の鉄鉱山が見つかり、フランスの政府機関“海外鉱物資源開発公団BRGMとBritish Steel（英）とItalsider（伊）窓の欧州の鉱山開発会社や製鉄会社などの共同出資により設立されたMIFERMA社によって開発が行われました。この鉱山会社よりニチメンは他社に先駆け、1963年に初の日本向け成約をなし船積みにもこぎつけました。その後長期契約も結びましたが1980年代末をもって日本向け出荷は途絶えました。

フランスから6時間ほどの飛行時間でモーリタニアの首府のNOUAKCHOTTや鉄鉱石の積出港のNOUADIBOUに着きます。北回帰線直下のこの国は、強烈に暑く50度を超える日々が続く、砂嵐が吹き荒れる季節と冬の偏西風が心地よく感じられる季節に分かれ気候的には厳しいのが特徴の国です。1年中晴れで雨はほんの数日しか降りません。一度、鉄鉱山で雷が降ったことがありました。その時現地の人々は雷を誰も知らずただ驚くばかりで、フランス人たちが雷について一生懸命説明している場面を思い出すほど雷や雪などとは無縁の土地です。さらに気候に関して言えば代表的なのは当然前述の砂嵐です、吹き出すと現地の人々は「ハムシハムシン」（アラビア語の55を意味します）と呼んで55日間吹き荒れるとされ

ておりました。砂嵐の季節は目が開けられない、昼でも真っ暗になる細かい砂塵が強烈な風にあおられて舞い、口も目も鼻も体中が砂だらけというひどく酷な状態にさらされます。その砂嵐の吹き荒れる間は飛行機がほとんど飛ばないので、山元と積出港までの600km強を48時間かけて走る鉱石輸送車で旅をせざるを得なくなります。百輦を超える鉱石運搬車の中に一両のみ客車を繋ぎますが、飲み物、食べ物、寝具などを自ら持ち込み、上下線の擦れ違いのため停車する間に、砂をよけつつ食事をしなければならぬ、なんともはや世界一過酷な旅を強いられます。今となればよき思い出ですが、最初の旅直後は二度とやりたくないと思いました。一度目は亡くなられた小川宇士雄さんと一緒でしたが、2度目はたった一人の外国人でしたので、現地の人のみが仲間の旅となりました。途中で水が足りなくなり、その人たちにもらった水に当たりひどく苦しんだことを思い出します。このような遠距離且つ過酷な長旅をした鉱石が日本に運ばれており、そのような業務に携われることに感動を覚えました。

そうした国の砂漠の思い出をもう二つ挙げますと、砂漠で見る夕日の沈む景色は忘れがたい素晴らしいものです。沈みだす太陽の地平線に消える速度は正に数分といっても大げさでないほど早く進みます。夕焼け空は真っ赤で脳裏に焼き付きますが、私がさらに驚いたのはその夕日だけでなく、乗っていったJEEPの座席の白いシートが日没を見終り車にもどろろと振り返ってみると真っ黒になっているのでした。どうしたのかとびっくりしていると、運転手が「あれは人の汗を吸いに来たハエだよ」と教えてくれました。「本当にハエ」と一瞬信じられませんでした。車に近づくとやはりハエが一斉に飛び立ち元の白いシートが現れるほどと思いました。次の瞬間、砂漠のど真ん中に見渡す限り食べ物もないところに、どうしてハエがこんなに大量発生するのか不思議でならず、現地の人に「どうしてこんなにハエがいるのか」と聞きました

が「いつもいるよ」というのみで、何故乾燥しきった、強烈な太陽の下、食物らしきものも全くないところにこんなにハエがいるのか、という謎には答えてくれませんでした。今でも謎のままですが忘れえない出来事でした。

もう一つは、鉄砲水と一夜にしてできるお花畑の話です。「15少年漂流記」、「八十日間世界1周」、「海底二万里」を書いたフランス人作家のJules Verneの「砂漠の秘密」という小説があります（岩波文庫から日本語版が出版されています）。この小説に、一夜にして忽然と現れる砂漠のお花畑の光景が描かれています。鉱山で過ごしたある一夜の夜中に砂漠地帯では信じられないほどの雨が降りました。こんな強烈な雨が降ることもあるのだと感心していたら、朝GUEST

HOUSEに現地の方が来られ、今すぐ川と花を見に行こうと誘ってくれましたが昨夜の雨のことと川と花が結びつかず、川もいわんやお花畑もこの国で一度も見たことがないのに、この人は何をいったい言っているのだと、きょとんとしていると「昨夜の雨で川が氾濫しお花畑が生まれた、この光景はここに長年住んでいてもめったにお目にかかれるものでないのでぜひ見ておきなさい」と言われ連れ出されました。小高い丘に登り眼下に広がる光景は信じられないものでした。低地を泥水が勢いよく流れ、川に沿って一面が緑に覆われているではありませんか、しかし、お花畑はまだ出現していませんでした。案内してくれた人は、その日の夕刻から翌朝にかけてお花畑となるといつて夕方再度訪れようといつてそこを離れました。夕方再度丘に来てみると黄色や赤の花が一面に咲き乱れているのが目に入り信じられない光景となりました。

この二つの経験は、今でも真に信じられない砂漠の光景です。たぶん読者の皆様にも信じていただけていないと思いますが、これが「砂漠の秘密」なのです。

この2つ体験は砂漠の自然現象ですが、現在の文明社会では考えられない人権問題

が砂漠の鉱山にありました。それは、私たちがこの世界から消滅したと思っている奴隷制度です（20世紀末の国連の発表では、当時世界には20数か国が奴隷制度を敷いているとして非難していましたがモーリタニアもそのうちの一か国でした）。やはり、山元で過ごしていた数日間、ダンプ、ブル、ショベルカーなどをモーリタニア人の運転手が操作しているのを見ていました。特に、日本のコマツのブルドーザーを始めて納入したことでコマツの人とともに現地の人にトレーニングする目的で山元にいたので運転者たちをよく覚えていたし、何人かとは食事をしたりしていました。この国はイスラム教国なので毎週金曜日が給与の支給日でした。そうしたある金曜日たまたま経理人事部のある建物の前にいましたら、作業服でないアラブ服に身を包みターバンを巻いた年配の人たちが集まり給与を受け取っていました。そこから数十メートル離れたところに見慣れた各種機械のオペレーターが屯していました。給与を受け取った年配者たちがそちらに歩み寄り一人一人に分厚い札束から何枚かずつ手渡していました。変な光景ですからすぐにそばのフランス人に、「なんであんなことするのか」と聞いたところ、オペレーターたちは年配者の奴隷だ、だから奴隷の持ち主に給金を払い、持ち主が自分の分を手元に残し各オペレーターに奴隷の身分に応じ、その身分に見合った給与を払っているのだと、びっくりポンの話をしてくれました。この制度が今日でもモーリタニアに存続している確証はありませんが、この現場で見たり知ったりしたのは1990年ごろでした。その際、奴隷であったブルの見知ったオペレーターに「君は技術を持っているのだから独立できるのになぜ奴隷なのか、奴隷で満足しているのか」と聞いたところ、満足しているし、奴隷の身分を変えるつもりないというので、その理由を確かめました。答えは、奴隷の持ち主を中心とした共同生活とその絆にあるとのことでした。結婚、病気の際の治療費と看護、子供の教育費（優秀な子には学費の援助が大学まで続けられる）などを奴

隷の持ち主が負担してくれる強いきずなで結ばれた昔からの砂漠の知恵が授けた制度から離れることなど考えられないと言っていました。私たちは自分の常識で闇雲に奴隷制度は悪いものとして頭から否定するが、南北戦争時のアメリカの奴隷の扱いと待遇とは異なる、このモーリタニアの奴隷制度を見て、先進国が自分たちの価値判断で無理に現地の事情に合わないことを押し付けていることを垣間見ました。

その他にイナゴの大襲撃、ZUERATEの町でのテロ体験、山や港で働く欧州人と現地の人との強烈な格差、一夫多妻の夫の苦労などいろいろ体験しました。商社マンとしての私にとり最も大きな収穫と体験は、1974年にMIFERMAが国有化された事件です。国有化後、そこで働いていた欧州人のほとんどが追い出されるか、逃げるかして一時山や港には外国人の姿が掻き消えました。そのため鉱石の採取や搬送や積み出しが行われるのか心配、危惧されました。しかし、大方の予想を覆し鉱石の出荷は無事に滞りなく継続し、1980年代には新しい山であるGUELBOも開鉱し、今でも年間1千万トン前後の出荷を続けています。リベリア、アンゴラと言ったアフリカの国から日本向けに鉄鉱石が出荷されていましたが、今ではこれらの鉱山は閉鎖され南アフリカとこのモーリタニアを除き生産停止となっています。前述のような過酷な条件下で現地の人々の力で鉱石を生産し、出荷を続けていることは敬意に値すると思いますと同時に、アフリカの真の独立を暗示するものがこの山の操業にはあると思います。アフリカの多くの国は今日現在でも貧困、疫病、内乱や紛争、汚職などに悩み、一向にTAKE OFFの兆しが見えないなかで、自らの努力で存続していることに、国際社会の人もアフリカの人も良くかみしめ分析、考察の上今後の指標とすべきではないでしょうか？

そうした意味も込めて、この国の今後にもっと頑張れとエールを送り筆をおきます。

会員寄稿文

秀吉を超える人生を生きよう

—わが子・孫たちへ—

内 田 英 三

(序)：皆も日頃から時々、宇宙ってどうなっているのだろうか？人間ってどこから来てどこへ行くのだろうか？との素朴な疑問を持ちながら、日々の生活、雑事に追われ、うやむやに終わらせたままになっていると思う。

現役時代の私もそうであった。時間的余裕ができたここ10年間に同主題につき勉強して得た結果をお伝えしたいと思います。内容を正しく理解し、それぞれの人生に実践すれば必ずや掲題通りの人生を克ちとること請け合いです。

以下記述の理論的根拠は、自然科学、社会科学の成果の上に立って、人文科学的解明によるものです。

(注1)；何故ならa) 天文学物理学では現状、宇宙の構成要素の物質28%の5%しか分かっていない、あとの23%の物質は「暗黒」物質：要はどんな物か分かっていない。宇宙の残り72%は「暗黒」のエネルギー、即ち全く分かっていない。b) 現代物理学の最先端の「超ひも理論」は我々の住む宇宙は三次元+時間だが、宇宙全体は10次元か11次元らしいとまで分かったが詳細は未解明。以上に対し社会科学を含む人文科学の世界では

イ) 潜在意識の心的外傷治療に有効な退行催眠現場からの情報 ロ) 世界中から、もたらされる臨死体験者達の超意識世界の情報 ハ) 前世の記憶を語る世界中の子供たちのレポート ニ) 産婦人科医 池川 明氏の「子供が親を選んで生まれてくる」ホ) 上述退行催眠で語られる「生まれかわり」の実態の報告等、数々の超常すなわち三次元を超えたレポートに基づき、次のような3次元を超える多次元的

情報が寄せられ、一挙に宇宙の仕組み解明へと繋がった。即ち

I-1 宇宙は境界も限界も無く、唯存在している意識体で、その意識はあらゆるものを一定の法則の下で統制しながら、自らを限りなく成長させようとする存在である。

I-2 成長を目指す自己研鑽の場として必要であったから、ビッグバンという現象を起こして、普通という宇宙を創った。上記-1は「精神宇宙」に対しわが宇宙は「物質宇宙」という。故に宇宙は精神宇宙と物質宇宙の二重構造となっている。(注2) 現在の天文学で分かっている銀河系のような星の集団は一千億以上、地球類似の環境を持つ惑星は無数に存在し、銀河系だけで1億以上は有る。その中には人類よりももっと優れた文明が有ると予想されている。

(注3) 1929年発表の「ハッブルの法則」によれば宇宙は膨張を続けて居り、而も遠い銀河ほど速いスピードで遠ざかっている・・・と。

I-3 精神宇宙の意識体の一つの分身である人間も、肉体を持たなければ経験できない研鑽を積むために、自ら希望して物質宇宙の一つの地球に生まれて(一つの肉体につながって)人生経験をしている。精神宇宙は人間の成長に成果をもたらすための課目として「死」「病気および身体的ハンディキャップ」「人間関係のトラブルで苦悩すること—含む戦争」「時間」を課した。

(注4) 意識体の物質宇宙への移動のツールについては、現物理学的には、1905年26歳のアインシュタインが発表した

公式： E （エネルギー）＝ m （物質）
× c （変換率＝光速）の二乗が有るが、
前述超ひも理論の10－11次元の空間
では問題外であろう。

I－4 精神宇宙の望むものは精神（＝魂）
の成長故、物質宇宙で人間に必要な物質
の成長には無頓着。人間はその理をわき
まえて研鑽する必要がある。それが一定
期間（寿命）中に果たせない時、繋がっ
ていた古くなった肉体から離れて精神宇
宙に還る。

I－5 そして一定期間精神宇宙で過ごし
（中間生と称す）また新たな成長を目指し
て物質宇宙へ向かう。これを「生まれかわり」と言う。生まれかわりは魂の成長
を遂げんとする者に必須事項である。次
のようなエピソードはその辺の事情をよく
表している・・・聖徳太子が二歳で
経を読んだ *モーツァルトが5歳でシ
ンフォニーを作曲した *近くは全盲の
ピアニスト辻井伸行が、98年10歳でオー
ケストラデビューし、11年1月にはカー
ネギーホールのリサイタルデビューを果
たし、以来世界的注目を浴びるに至った。

“人間は死なない；魂は生き続ける、入
れ物を替えながら。”

I－6 地球史年表というのを見た。46億
年の歩みの中で顕著な記録が目を引く。
いま世界中の展覧会場を賑わせている恐
竜の一代記だ。ほぼ二億年続いたいわゆる
恐竜時代が6,550万年前にメキシコの
ユカタン半島に落ちた小惑星（地球の直
径の約千分の一）の落下により全滅した。
何しろマグニテュード11を超え、津波約
三百メートル、広島原爆の約十億倍とい
うから想像を絶する災害であったことが
窺える。以後同種の再生はない。振り
返って、我がホモサピエンスの歴史はた
かだか20万年である。恐竜時代の千分の
一だ。

私見だが魂の進化を望む精神宇宙が、
2億年間の彼の進化結果とホモサピエン

スの短期間のそれを比較したとき精神宇
宙の意識が人間の脳に繋がって期待を膨
らませていることが窺える。

ついでながら800年後地球にもユカタン
半島に落ちたものの半分強の小惑星の
地球への落下が予測されている由。それ
には原爆で回路を替えさせる計画との事。
恐竜にはそんな芸当は望めませんよね。

II 乱世の世に国家統一を成し遂げた大功
労者の秀吉であるが、人間として「精神、
魂の成長」に励んだ跡は殆んど見られず、
揚げ句「精神、魂の成長」とは相反する
所業で、利休を切腹させる挙に出た本人
は、やがて「露と落ち露と消えにし我が
身かな浪速のことは夢のまた夢」の辞世
を残して散った。

歴史上類を見ない力量の持ち主だった
が活躍の方向が間違った、時代が悪かつ
たと云うには惜しみても余りある人物で
はあった。

III－1 諸君にお伝えしたい；人生を気持ち
良く、意義あるものにするには、秀吉を
反面教師として、各自それぞれの持てる
得手、特技を生かして、明るく、耐える
ところは耐え、奉仕精神をもって「魂の
成長」につながる方向に（名誉、物欲に走
ることなく）精励されることです。

III－2 孫たちへ；上記I－3で四つの課目
を書いたがそれら凡て各自の実力の一寸
だけ難しい程度の問題集であり、頑張っ
て解いてのけて、成長、進歩が有る。こ
の点に関連して思い出すことが有る；

嘗て商社の営業部長時代、得意先の或
るメーカーの社長さんと旅行中の会話の
中で「内田さん、公私どちらでも、人生
の岐路にも匹敵する（右左二者択一の）
局面を迎えた時は必ず、困難な方を選び
なさい。その方が良い結果が得られるも
のですよ、ie. 正解」と諭されたことが
ある。その時はそんなものかと聞き流し

ていたが、上記と関連するのでお伝えして置く。

ついでながら同課目の中に有る「時間」は言うまでもなく「死」とともに不可逆性だがこちらは進歩への反省材料、経験を提供してくれる大事な科目と受け止めて重用してください。他方精神宇宙に「時間」は無い、故に貴重なのです。

Ⅲ-3 明治末生まれの歌人、斎藤 史に「お暇を頂きますと戸を閉めて出てゆくようにはいかぬなり生ハ」という歌が有る。「生」の終わりが難しい時代になってきた。元気でしたいことをして長生きして、ある日ポックリというのが理想である。

その為には健康維持が必須である。アラフィフテイの皆さんもその齢以降は「転ばぬ先の杖」で毎年定期健診プラス常時「傾向と対策」よろしく自身の体調を監視し、不調への対策に留意してください。なにしろ西洋医学は症状を止める事はできても治すことは出来ないからです。治すのはホモサピエンス20万年の我々先祖が営々と築いてくれた自己治癒力であるからです。そして何しろ「予防に勝る治療は無い」です。

Ⅳ 思えば幼少期、虚弱児で両親によると「三度死にかけた」者をよくここまで生かして頂いた。これも今まで“半煮え”の理解で終わっていた宇宙の実態、銀河系のポジション、そこに生きる人間の立ち位置をはじめ「人生の生きる目的と意義」を皆さんにお伝えする役目を頂いていたからかもしれません。

この上はわれら夫婦の余生において「魂の進歩」の幾らかでも実を上げて「精神宇宙」へ帰れるように努めたいと念じて居ります。(了)

参考文献

- I 飯田史彦（元福島大学経営学部教授、無料の社会福祉施設「光の学校」を2009年に創設しカウンセリングを無料で精力的に行っている）著；決定版「生きがいの創造」、「生きがいの催眠療法」、「生きがいの真実」、「ツインソウル」、「生きがいの創造III」、「同IV」、「同V」、「生きる意味の探求」、「人生の価値」
- II i) 関 英男 工学博士「高次元科学」
気と宇宙意識のサイエンス(1)&(2)
ii) 桜井邦朝 神奈川大学教授、元NASA主任研究員「宇宙には意思がある」
iii) 二間瀬敏夫 東北大学院教授「どうして時間は流れるのか」
iv) 佐藤勝彦他当代第一戦の物理学者9名の共著「思惟する天文学」
- III 科学雑誌 Newton 別冊
 - * 2008 9月 相対性理論 改訂版
 - * 2009 11月 宇宙論
 - * 2010 5月 $E=mc^2$
 - * 〃 9月 地球
 - * 〃 10月 宇宙誕生の1秒間
 - * 〃 11月 生命誕生の謎
 - * 2012 10月 宇宙論第2版
 - * 2013 1月 超ひも理論
- IV Neale Donald Walsch 「Conversation with God」No.1, 2and 3

会員寄稿文

リトル香港：サンダカン

奥村 睦 夫

1969年の大学研修旅行（当地サンダカン＋東マレーシア＋インドネシア）を経て、70年入社以降の駐在・出張を重ねたサンダカンは私にとって忘れられない土地となっております。ある日、自室内整理中に忘れていた当時の写真を発見、数々の事が思い出され、一筆残しておくべきと決心した次第。

サンダカンと言えば「八番娼館」とオラン・ウータン（“森の人”の意）を思い出される方が多いでしょう。波静かな湾内に位置する“リトル香港”とも言われるボルネオ島北部の小さな町が60～80年代半ばまで南洋材の一大輸出港で、最盛時には木材業界の日本人が家族も含めて200名ほどが居住しておりました。70年代後半には日本料理屋も数軒あり、日本の花火師を呼び寄せた花火大会も開催されたり、結構賑やかでした。地図で犬の頭が東マレーシアサバ州、目がサンダカン。当地は旧英領北ボルネオで英国色が彼方此方に残り、住民は山岳系原住民と陽気でお酒好きな客家系

華僑が多く、お酒大好きの私にはピッタリのところでした。ブルネイを挟んだボルネオ島西側のサラワク州の華僑（質素儉約を家訓とする福建省出身者が多い）とは出身地による華僑気質の違いを感じた次第。現在は西岸の南シナ海を望むコタキナバル・ビーチの日没、標高4095mのキナバル山（現地では「神の山」）とキナバル自然公園が売り物のリゾート地となっており、成田空港からも直行便で気楽に行けるし少し足を伸ばせば（空路約40分）サンダカンに行けます。キナバル山は富士山よりも高いが私でも登頂（2015年5月）できる登りやすい山で多数の日本人クライマーが押し寄せております。

日綿実業は1962年に岡村誠二駐在員がサンダカン駐在員事務所を開設し、以降多くの南洋材担当者が駐在、出張し、買付と検品業務に励んでおりました。ここに懐かしい先輩のお写真を載せさせていただきます。



ボルネオ島：サラワク州・サバ州



初代所長：岡村さん 2代：大山さん



3代：殿護さん 大山さん 華僑シッパー



1980年 サンダカンベイから見た「リトル香港」＝サンダカン



2010年 日本人墓地 墓参の筆者

ご承知の方も多いと思いますが、木材の価格のうち運賃が大半を占めます。大げさに言えば国内の裏山から消費地へ運ぶより、海外からの専用船による大量輸送の方が為替変動（円高）の助けも得て、採算に乗るようになり商売になったわけです。林地で伐採、玉切された原木は大型トラックで近くの積出港へ、日本の各港へ運ばれる。昔は写真の如く人力出しで細々と、後の機械化（チェーンソー、ブルドーザー、ログフォーク、ローリーなど）で木材専用船一隻分（約6000m³）の注文にも対応可能となった。原木は主に合板（ベニヤ）工場に買取られ、コンパネ（コンクリート型枠用合板）、一般合板などに加工され、住宅建設はじめ、建築業界にとって欠くことのできない必需品となり日本の高度成長を支えておりました。

良質の原木（樹種、太さ、長さ、形状、色、新鮮度、グレードなど）、シッパーの出材能力、FOB価格、海上運賃（チャーター）、為替がポイントで、且つ、良き顧客に恵まれて、現地でも国内（私の場合、西日本各港）でも忙しい日々を過ごさせていただきました。



↑木馬（きんま）出し＝人力出し
⇒機械化により消滅＝業界用語で「クダクダ出し」と言う、「クダ」
とはマレー語で「馬」の意味



LORRYによる大量輸送

*南洋材輸入イロハ：

- ・樹種：代表的なのがラワン、これはフィリッピン（比国）での名称で、東マレーシアでセラヤ、インドネシアではメランティと言います。他にもアピトン、カポール、ジェルトンなど用途により使い分けます。
- ・用途：合板、建築用材、枕木、土台角、床材、造作材、家具材、仏壇用材など多種多様。
- ・原木輸入量：1973年がピークで約2680万m³、内インドネシアが約1200万、サバ州が730万、比国が590万
注）1980年代中葉から現地製品化が進み、2015年の原木輸入はマレーシアの18万m³のみ。合板など約190万m³がマレーシア・インドネシアから輸入されております。
- ・取引単位：m³＝立方米（リューベ）、国内では、石（コク）、換算率：3.6石／m³



木材専用船（積載約6000立方メートル）

* 駐在員が利用した往年の名機 :



ダグラス社双発DC3機



英国製TWIN PIONEER機

後に、フォッカー・フレンドシップ機 ⇒ B737

* サンダカン八番館・からゆきさん墓（正式名称は「日本人墓地」）:

77年の駐在時、既にかかなり整理整頓されていたお墓を訪れ、献香させていただいた。市街中心部背後の山腹にあり、市街地と湾が見える眺望すばらしい一画にあった。遠く故郷を想う“望郷”の高台である。

60年代中ごろに日比貿易の駐在員が“からゆきさん”の文献から、お墓の存在を発見した」との伝聞がある。残念ながら、八番館の跡地は今もってわからずじまい。ここだっただろうはわかるが確証が無い。

2010年、24年振りに墓参。インド人墓地横の細道を進んだところに「日本人墓地」の標識、既にきれいに整地、4段に整頓され、「後藤勝美29歳、ラハダト業務中死亡、1974年1月29日日比貿易」、「雲南丸船長:伴野源四郎、昭和3年8月、大阪商船」、「木下クニ」、「からゆきさんらしき名前、建立者:木下クニ」など合計15基の墓石が見られた。帰国を果たせなかったの望郷の念はいかばかりだったか。

* 最後に、豊田穰著「北ボルネオ 死の行進、玉砕!」の概略を紹介しておきます。

昭和20年1月～6月、第37軍と在留邦人約2万名がサンダカン捕虜収容所の英豪軍約2千名を引き連れ、サンダカンからラナウまで道なきジャングルを約260キロ行進してる。多数の死者が出たので、パターン死の行進(米比軍、約60キロ)、インパール白骨街道(日本軍敗残兵)と並び、“サンダカン死の行進”と言われ、捕虜を巻き込んだ行進としては捕虜人数、行進距離、死者数(英豪軍捕虜の99%、日本軍の約40%)が多いことから「最悲惨」と言われている。尚、生残り日本兵のうち約千名が西部沿岸のラブアン島、シピタン、ブルネイでの無意味な戦闘で玉砕したとも記述されてる。

— 完 —

会員寄稿文

五 島 列 島 紀 行 記

高 尾 勝

紀行記を書くべく資料などを整理し始めた今日（5月2日）、日経新聞が横綱佐田の山の死去を理事長としての先見性を称えつつ報じていた。知る人ぞ知る 五島の島花は椿、力士を輩出した。古くは戦前の大関五つ島奈良男（奈良尾村出身）、小結五つ海（出羽一門 千代の山・栃錦と同時代）、現時津山親方、などなど。

特に佐田の山（旧姓佐々田晋松）は有川町の出身で私の亡父が町長で地元後援会長だったこと、二番目の妹と同級生だったこと、で身近な存在だった。尚、全国区的著名人 野球の野茂英雄の父親は五島奈留島の出身である。



第50代横綱佐田の山像

戦後、南鮮太田府から亡父の郷里 有川町コウノクラ神之浦に引揚げたが、神之浦は戸数30弱の電気も通じていない僻地で学校は複式授業、私は此处で毘で小鳥捕獲、戦わせる為の蜘蛛飼育、などを覚えながら4年間で過ごしたあと長崎市に進学した。

横浜育ちで先祖の地、五島を知らない親

戚の者たちの予ての要望もあり、亡母の仏事を佐世保で執り行う機会にi-氏とその子息2名を伴って久しぶりに五島に渡った。今回の行程は 長崎-五島-佐世保、世界の文化遺産候補“長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産”の中心地でもあるので、‘美しき教会巡り 自然が織りなす祈りの五島’を中心に据えてご紹介する；

五島の地史（添付地図参照）

南から 福江島、久我島、奈留島、若松島、ヒサガジマ ナルシマ カミトオリジマ オジカジマ 上通島、で構成。その北は小値賀島、宇久島、を経て平戸に連なる。福江島は平地に恵まれているが、他の4島は見るからに岩島で平地が極めて少ない。



五島列島地図

戦中は漁獲に精を出せる環境になかったことで、戦後数年間は五島灘で鰯が大変な豊漁で巻網漁船が鰯で重過ぎる網を切り破ってようやく網を揚げたと云う話が多々あったが、漁場の中心が徐々に北上し日本海に移るにつれ五島の景気に陰りを生じた。好景気時に五島の人口は約14万人と言われたが、過疎化の進行が町村合併の流れに繋がり、嘗て福江島と上通島には4-5カ町村が存在したが、現在では福江島・久我島・

奈留島が合併した五島市（通称^{シモ}下五島）と上通島・若松島が合併した新上五島町（上^{カミ}五島）が存在するのみで、人口も前者が3万人強、後者は約2万人。因みに上通島と若松島は橋で繋がっている。

上通島では出土した人骨、打製・磨製の石斧、土器片から縄文人が居住していたことが確実視されている。日本は630年から838年にかけて遣唐使を派遣しているが、当初は朝鮮半島^{シモ}添いの北路を採っていたが、663年の白村江の戦い後、新羅との関係悪化で五島から危険な東シナ海を横断する南路を取るようになった。16次遣唐使船（804年）には空海や最澄が乗船、最澄が入唐成就のお礼に開いたとされる山王山が中通島にある。

1187年 平家盛（平清盛の異母弟）が五島の北にある宇久島に上陸、宇久姓を名乗る。宇久氏が五島を征服、1351年 宇久^{スミナル}覚が福江島に居を移し、1587年宇久純玄が五島姓に改姓。

五島藩は開拓に従事する住民を確保する為に奔走、厳しい施策も行った。

五島のキリシタン

長崎県地方へのキリスト教伝道は1566年に開始されたと云われるが、家康よりも神を崇めるキリスト教は徳川幕府にとって誠に都合の悪い宗教であった。

島原藩主松倉重政の酷政に対して天草四郎（本名 益田時貞）を指導者としてキリシタンと農民2万人余が立上ったのが島原の乱（1637.12.11 - 1638.4.12）で、それ以降幕府はキリスト教弾圧を強化して‘踏み絵’^{デラウケ}‘寺請制度’を実施した。寺請制度とは、ご先祖を弔う仏教形式を創りだし、全員が寺の檀家になってそれに従うことを強制した制度で、元来 仏教は輪廻転生の思想で先祖を弔う形式はないし、インドには墓もない。

キリスト教弾圧で、弾圧が比較的緩い離島などへのキリスト教徒の逃亡がみられたが、入植者を望む五島藩が大村藩に開拓民送込みを申入れ1797 - 99年に3000人が五島に移住、その大半がキリスト教徒であった。良港や平地に先住する原住民である地下人に蔑まれ差別されながら、彼等は山間部や地形の悪い入り江などに住み着いて、司祭がいない状態で伝承された信仰は“隠れキリシタン”として独自のキリシタン文化を築き上げた。

1868年1月明治政府成立後 神道国教化政策で、隠れキリシタンに対する迫害は禁令高札が1873年に撤廃される迄続いた。それに先立ち、1865年に長崎居留地外国人の為に献堂された大浦天主堂を隠れキリシタン拾数人が密かに訪れ、自分たちの信仰をフランス人宣教師に打ち明けた。この出来事は“信徒発見”と呼ばれている。



大浦天主堂(国宝)

禁令高札撤廃後、隠れキリシタンの約半数が宣教師の指導下に入ってカトリックに復帰し、夫々の集落に教会堂が建てられた。改宗した極く一部を除き半数弱は未だその信仰を維持している。

扱て、話を五島の旅に戻そう。

4月19日（水）、長崎港発11：30水中翼船で福江港着12：55。カンパーナホテルに投宿、椿油を使用しているとかで喉越しの良い‘五島うどん’で早速昼食。午後は門構えと石積塀が残る旧武家街と石田城（福江城）跡を見学。

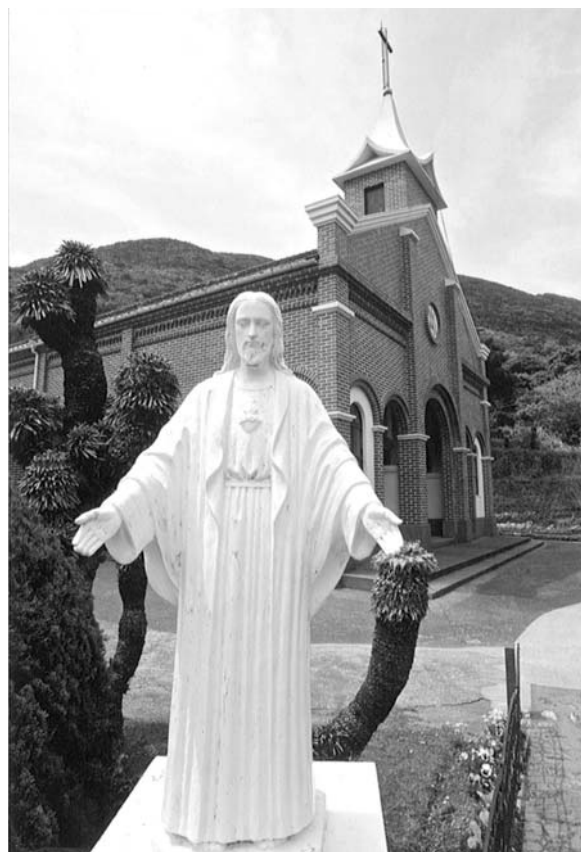
カンパーナホテルは五島隋一の立派なホテルで、2Fの和食堂‘萬葉’の魚料理は素晴らしかった。

4月20日（木）レンタカーで玉の浦の断崖絶壁にある大瀬崎灯台を見物後、井持浦教会を拝観し小銭を喜捨。水の浦教会を見学し福江島を半周して横断し福江に戻る。i-氏の子息は彼らの亡母（昭和6年生、私の従姉）が戦後京城高女から五島高女（現五島高校）に転学したので、五島高校に出かけて卒業写真などを入手。



大瀬崎灯台

福江市内は兎も角どこに行っても鶯の囀りが聞こえてのどかな感じになる。夜は、福江在住の従妹2名の招待で‘萬葉’以上の魚料理をご馳走になった。あとの上五島にも通じるが、刺身など新鮮な天然もので歯応えが全く違うことを実感した。



井持浦教会



水の浦教会

4月21日（金）福江港発09：20長崎行水中翼船で上通島奈良尾港着09：50。奈良尾でTaxiを拾って神之浦に向かう。所要時間約30分。待ち受けた86歳の従兄に墓場

に案内して貰って、鶯の声を聴きながら曾祖父、祖父など先祖様の墓詣でをし同行者も満足する。

アオカタ
青方からTaxiを呼んで、途中青方教会を見物して14時頃青方の宿に入る。Taxiで石油貯蔵基地を望める丘に上がって基地を遠望する。縦横400米×98米、長方形の鋼鉄製箱3個が横繋ぎされている。箱には夫々クレーンが付いており、箱同士もパイプで繋がって相互に浮力調整できる。貯蔵可能量は日本の消費量1週間分。



石油貯蔵基地

何時の事だか忘れたが、20年位前基地が出来たばかりの頃は、中古大型タンカー船を何隻も横繋ぎしており基地の近くで観察もできた、と記憶する。現在、近くに行くには陸路・海路いずれでも役場の許可取得を要する由で、案内してくれたTaxi運転手もテロ防止の為保安が厳しいと述べていた。

青方の宿は素泊まり、五島の各地でみかけたchain店のスーパーマーケットでウイスキーとつまみを仕入れる。店の規模もそこそこだし、品物特に水産物は新鮮で極めて安く横浜とは天地の違いがある。宿のオーナーが赤提灯の店に案内してくれ、魚料理主体の夕食を摂り、宿に戻って二次会。

4月22日(土)Taxiで青方から有川に向かい、観光物産協会、クジラ博物館などが雑居する船着き場で下車。有川は嘗てはクジラ漁で栄え町村合併以前は中通島最大の町だった。若干の資料入手後、Taxiで頭ヶ島教会に向かう(有川町友住郷頭ヶ島)。観



頭ヶ島天主堂(国定重要文化財)

光案内書によると中通島には29の教会がある由で、国定重要文化財の教会は中通島の^{カシラガシマ}頭ヶ島天主堂、青砂が浦教会、奈留島の江上天主堂の3か所。頭ヶ島の現天主堂は10年がかりで1919年献堂、全国でも数少なく五島で唯一の石造り天主堂である。因みに、福江島には教会は13、五島全体で51の教会がある。

中通島鯛の浦のキリシタンが迫害を逃れて、1859年無人島頭ヶ島に移住し、1867年にドミンゴ森松次郎が聖堂を兼ねた伝道師養成所を開設したが1868年(明治元年)の迫害で閉鎖させられた。禁令高札撤去後1887年に最初の教会が建設された。

余談だが、友住で台風災害からの復旧記念碑に「有川町長高尾博」の名を見た。

日に3本しかないバスの時刻に合わせて有川に戻り、有川港発14:25の通常型高速船で佐世保港着15:45。i-氏一行は長崎空港から羽田に向かった。

今回の五島訪問は天候に恵まれ、鶯の囀りを聞きながらの教会巡りで椿の花こそ時期外れだったが自然を満喫し、佐世保でも仏事のあと99島巡り。横浜に戻って勘を取り戻すのに丸1日を要した、初めての経験である。

会員寄稿文

サッカリンの娘と韃靼海峡

浜 地 道 雄



新春。所要で都内泉岳寺駅から、京浜急行下り特急に乗車。

発車まもなく同じボックス席に座った二人の金髪娘が聞いてきた。

「この電車はSky Treeに行くか？」とー。

え、まさに逆方向。特急とて横浜まで止まらない。

焦っても仕方がない。横浜でとんぼ返りだが、着いたら教えるから安心せよ、と説明。

さて、そこで「Where are you from?」と speak-up。二人は完璧な英語を話す。

一人（写真左）はEnglandからとのこと。

そしてもう一人（写真右）はfrom Russia とのこと。ロシア人がこんな完璧な英語を話すのか？

と、思いながら「with love?」とオヤジ風のジョークが受ける。

* From Russia with love「ロシアより愛をこめて」とは勿論、「『007』シリーズ」映画の第2作だ。1963年の昔話が通じたー。

「ロシアのどこ？」 サッカリン。

サッカリンと聞こえる（汗）。え、と二度三度聞いてはじめて分かった。

Sakhalin サハリン樺太とのこと。そこで、生まれて育ったよし。

で、何をしてるの？ English teacher。（小）学校で英語を教えてるとのこと。

話題はそこから、日口関係、そして「（英語）教育の目的は世界平和」（鳥飼玖美子教授）というところまで及んだ。

「日本は憲法第九条で戦争を放棄してる」と言うのと、「え、知らなかった素晴らしい」。「帰ったら子供たちにそう伝えます」。

そして「日本がいきいよ好きになりました」というところで、横浜駅に到着。あわただしく、下車していった。わずか30分、春にふさわしい気もちのよい会話だった。

残ったオヤジは一人、「春」という題の「てふてふが一匹韃靼海峡をわたっていった」という安西冬衛（1898－1965）の詩を思い出していた。

1920年、安西は父の赴任先で日本の租借地であった大連に渡るが、翌年病を得て、右脚を切断。

故国への帰国を諦めねばならなかった。

そんな望郷の想いを、間宮海峡（＝韃靼タタール海峡）からサッカリンに渡り、果敢に祖国日本に飛んでいく小さな生き物に託したのであった。

（了）



畏友・埴生栄勇さんのご逝去を悼む

長谷川 洋



去る二月、桜の開花を観ることなく、埴生さんが逝ってはや三ヶ月が経つが、小生には未だに、そのご逝去が実感できないほどに突然の旅立ちでした。

亡くなられた二日前には、ニチメン同期の会（ミニ33会）幹事の大谷毅丈夫兄に病院から電話して来て、“主治医の許可が下りたので、会には出席できる”と連絡があった。

奥様には、着ていく背広などの手配を頼み、出席を楽しみにしていたのに、その夜、容態が急変して、帰らぬ人になってしまった。

埴生さんの訃報に接して、東西の友人・知己から追悼のメッセージが多数寄せられた。

新入社員時代、埴生さんと机を並べて仕事をして、残業した後には、梅田新道あたりの飲み屋で酒盃を交わしたものだと言懐して、大阪の田淵弘通さんから弔辞が届いた。

そのほか、宝塚逆瀬川独身寮時代を知る諸兄からも、“ニチメンきってのジェントルマン”にしてダンディな埴生さんの死を悼み、生前のお人柄を偲ぶメールが寄せられた。

それらはCOPYを取って、多くの記念写真と一緒に、お棺の中に入れられた。

埴生さんの愛読誌“TIME”の最新号や広島カープの優勝を報道したスポーツ新聞

と共に。広島生まれの埴生さんは熱烈なカープ・ファンだった。

昭和33年（1958）、プロ野球読売ジャイアンツに長嶋茂雄が、南海ホークスには杉浦忠、本屋敷が入団した年に、我らは日綿実業(株)中之島本社で入社式に臨んだ。

爾来、60年近くの埴生さんとの付き合いであった。

とりわけ宝塚独身寮時代の付き合いが懐かしく思い起こせる。

埴生さんの部屋には、バイオリンやレコード・プレイヤーがあって、しばしば訪ねてはクラシック音楽を聞かせてもらった。

その時、聴いたブラームスの交響曲第二番は鮮明に覚えている。

又、埴生さんの部屋には舶来品など貴重なものがあつた。小生が髭剃り負けで肌荒れしていたら、“君、これ使えよ”と言って、OLD SPICEの乳液をくれた。

1960年、入社二年頃から、埴生さんとは一緒に、英国人ムーア御夫妻の社交グループに通った。阪急・夙川から苦楽園に入ったところに“播半”と言う旅館があり、昭和天皇もお泊りになった旅館の別館小ホールで、英会話と社交ダンスを習った。

埴生さんは、そこで、武庫川女子大の先生だった恭子夫人と出会った。

ニチメンからは故岩下兄や故疋田兄も一緒に通っていたが、埴生さんのみ賢夫人をそこで見つけられた。そこには、ヅカガールも来たことがあるが、足の長さで我らは負けており、残念ながら相手にならなかった。

埴生さんから頂戴した恩顧で忘れがたきものは、1966年に小生が結婚式を挙げてから新婚旅行に出かけるべく神戸港ターミナルに居たら、突然、埴生さんが現れて、サンドイッチを差し入れてくれたのには感激した。

花嫁が式場で食事が取れなかっただろうから とのご配慮だった。

この一事に始まり 埴生さんの長年にわたる友情とご厚誼にいま改めて感謝を述べたい。

近年、埴生さんにはクラシックのコンサートに再三、招待された。

サントリーホール、東京オペラシティー、横浜パシフィコ等々、いい思い出です。

終ったら必ずワインで乾杯だった。

我ら33年組の殆んどは入社して五年目ごろには、夫々、海外勤務となった。

埴生さんは米国（シアトル）へ、小生はインド（カルカッタ）へ。

其処から帰国後も、お互いに またまた海外へ、埴生さんはニュージーランド、又の米国へ、小生は ソウル、バンコク、ヘルシンキへ。

同期会が始まったのは50歳を過ぎた頃か

らだった。その後は、宝塚独身寮の仲間をコアにした“ミニ33会”で年数回は開催してきた。その33会メンバーでも、堀之内敬兄、因幡忠顕兄は既に先立っている。杉本佳久兄の訃報も、5月24日に入り、33会も全く寂しくなった。近い将来、あの世で全員集合となるでしょう。

埴生さんは、4－5年前か、思い立って一人旅で、英国・フランス旅行をしたそうですが、その時、パリではお嬢様が、態々、日本から駆けつけて お父様のアテンドのため合流されたそう。

“パリの空の下、幸せな父と娘の滞在記”を、埴生さんは嬉しそうに話してた。

JR東海の優秀な管理職のお嬢さんのお世話は、埴生さんにとって大変心強いものだったそう。

今頃は、あの世で、賢夫人のお世話振りとか お嬢様方との来し方を振り返って微笑んで居られる事でしょう。

残された、我ら33会メンバーが 今しばらくは、この世に居れるように見守って下さるよう。

埴生さんの場合は、我らは決して Out of sight, out of mind にはならないでしょう。



“埴生さん最後のMini－33会” ； 2016・12・01 大崎ニューオータニ・イン；
左から、大谷毅丈夫、長谷川 洋、松田邦夫、埴生栄勇、阿賀信夫、鎌田亮三。

【編集後記】

桜が終わり、ますます緑が深まり、本格的な夏が近づいて来ました。

7月の社友会総会を控えて、茲に『会報22号』をお届けします。
今号も、個性豊かな書き手の皆さんのお陰で、内容豊かな会報ができたこと、大変有難く思っております。

ところで、今は人々の活字離れが進んでいるらしいですね。大新聞や名の通った雑誌の類いの購読数が軒並み激減していると聞いています。近頃騒がしいスマホなど、ネット・ニュースとかいうものが優勢になっているためだと言います。

しかし、わが社友会の会員に限って言えば、ホームページの閲覧率は決して高くはなく、会員諸氏の大多数は社友会関係情報取得を、やはりこの活字の「会報」に依存しておられるのだろう、と思われます。その意味で、我々活字会報の編集部も頑張らねば、と、夏冬年2回の発行に努力を続けているわけです。

そこで、これまで未だ投稿なさらなかった会員各位に特に、お願いがあります。
各部門別OB・OG会、同期会、同好会ニュースはもとより、詩歌、エッセイ、旅行記、駐在国の思い出、経験談、趣味のこと、老後の生き方・過し方、物故者に対する追悼文等々、なんでも結構です、是非ご寄稿をお待ちしております。

倉 持 次 雄

ニチメン東京社友会

〒100-8691 東京都千代田区内幸町2-1-1
飯野ビルディング17F

発行人：倉又 則夫 副会長兼世話人代表
編集部
顧問：長谷川 洋 副会長兼世話人
責任者：倉持 次雄 世話人
部 員：奥村 睦夫 世話人
中田 龍彦 世話人
印刷所：(有) 関 内 印刷